竹頌木偈錄

昭和三年十二月起筆

特別
1919
409

176674

古欧木版画録 一

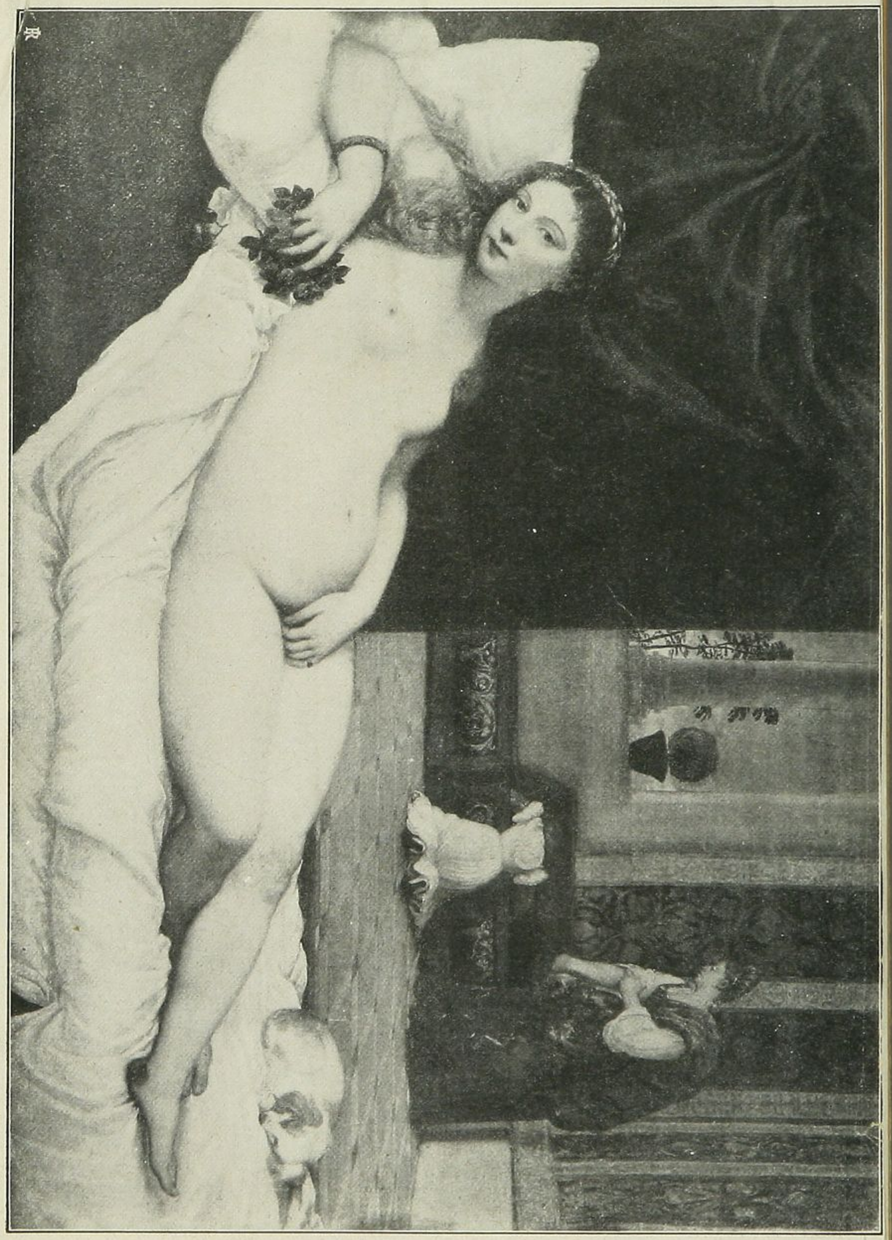
昭和三年十二月起筆

ヴエセルリ・チシアン筆（トリビユーンのヴキナス）

此繪は伊太利フロレンスの王立美術館ウヒツチ畫堂に掲げられてある、世にトリビユーンのヴキナスと稱せられて居る所の裸體畫に於ける最高の名畫である。恐らく彼が羅馬法王ポープの寵招を得て名譽と光輝ある生活を送つて居る際に於ける彼の藝術の絢爛期の作品の一トつであらう。其幻想的典雅な風貌と、流暢なる線條の美しさ、豊滿なる肉體の充實感は正に英雄をして恍惚たらしむるの魅力がある。唯惜むらくは左手の置き所少しく惡るい爲めに藝術に無智なる日本の巡遊者などは此繪を見て、大分憤慨して來る者が多い樣である。彼の名作の數々はルーヴルやドレスデン始め歐洲の國立美術館に珍藏せられて居るのである。

彼は千四百七十七年にヴエニスに產れベルリニを師とし、千五百七十六年死に至るまで時代の寵兒として幸福なる一生を送つたのである。

高村眞夫記



（ヴエセルリ・チシアン筆）

38- 9195

○十二月一日朝京を出し京都に着く、京都にて
御大典後拝観まつべきものなり、日本国古物合
の都なること今もなほ、地形実に内子を抱めし
京都の美観もそれまでなるが主なる目的なりしあり
六十の齢を三つ四つ越せども未だ足を踏入れし
関西に始きることなり、御大典後の拝観を
楽しみとして任せも拘てはなほ行くことなく、
なほ行くことなく、美濃路東子を主
任として一通り家を我を折りなるお守りをな
しなる程を拝観せ、強しなる大雪の日波と絶
しあんなれ、実に吹のあり二三の事を細述す、先
づ御不拝観のみ

標原製

京都にて六日の朝乃ち十二月六日は恰も日本国
之後場合実に三百三十年前の今日なり、
を祝さんとする日につき、国体こかへる
を慶とし、朝七時半輪御つこ参集すべしとの
命に接し、あまり五時に起床せるもの
是時なり、
る人数別無量にして各々全新橋の
待合せある間に、つ内人数入会来る花国体の
宴のごとく共数、美を尽せるを物語るに
く朝早きを行所斯くあるべし、の入場を許すべ
とて寒に感じて少きを化せず、清野お義を許
さんとするものとあり、一番を喫しとう、西八時と

京の五条寺の国仏寺他の国仏寺かつ、後流の
ごとく徐々行列を起し先が御成つるもの
えんらう かくて迂回して本堂のごとく殿堂のごと
く或いは式武い亭まつ約四十分ばかりまし
如何も学廉所前のお庭に入り坐り、紫宸殿
前庭物部とお殿を許さんと所上に陛り此
さこと事ばの御大典の設物実施もお殿す
ないこんが如何なるを、京御所と御性質の懐
第と遠さこんを偉こうる耶部を見るのみ
近上方側に相列なる旗小風に動いて感謝あ
り、御儀式前日を遥拝しまい部長を表せるとあと
ていてまく、一斉に頭を垂れて遥かに御座と第も

複原製

式を終りて大衆の行列行進を許せこいるかあて
示行進をつけて、御儀式の節聞きる建設つ
ものを鉄を見て、新生薬かる建物を造せかん
行くと、こいはまも果仕りもバラウりまきる如
何なる廣大なるこあるを、多くの宮の発列者の体裁
宮もまた谷宮の美観をあ出物子者の設備
あ、まんくの便所手洗不錆まか備いり、
まうくの扇きなるこあるを、実何とまく廊下を
流れ行くと漸やく階を登り、京地にある
ものか そこに大殿の為めに設けられ
る、式千を容るの巨室あり中央な
設備あり、西南の玉座まく玉

複原製

座の左右に主基悠基の風俗を画きなされ
凡そ、天井は彩色の金天井にして、四方は
[illegible]も壮麗と申す事迄、実に
[illegible]の御設の御座所にも八重と
[illegible]
行
伝き[illegible]ることなれば、先を[illegible]
遠からず。
此の大建築を出で更に導かれて大宮殿に到る、北の
宮の[illegible]所は[illegible]の跡なり今は白河[illegible]
松の[illegible]の地なり[illegible]白木の[illegible]を以て造
み[illegible]中央に大宮殿を[illegible]北所[illegible]
べて北の西新のものは[illegible]
つきの黒木を以て[illegible]左右を建[illegible]主基悠

基の西殿西黄[illegible]の[illegible]木[illegible]
日の[illegible]を[illegible]
人[illegible]
[illegible]実[illegible]基[illegible]
[illegible]
しめた。
尚此の春[illegible]
の[illegible]
[illegible]四時[illegible]
[illegible]
[illegible]

天と皇祖者も寡天に輝衆の他原を注意して脱帽
を命ずる的外套を纏ふことを許し以て機宜を
得たるものなる也
此前の御即位の時すでに人心の私議して御即位の大典
は京都に行はるべし、京都御不ハ幼少なる狭隘也
但此大嘗祭のみは京都に行はるべしとの
と云へしが歴史あるの大典は文祖歴史あるの
旧帝都の皇居に行はるべきは義あり然
もあると今次限りの御即位の大典
国体を顧慮せしめ如何と感じ
国体を顧慮する一法として、国体の精を表現す
る即位の大典を故実を換へ行はれ、之れを国内に

複原製

示すことが大切である。今次の御即位大典が前例なる
き程度を極めとなるも恐らく深意ここに存ずん
国体擁護の為めに多くの国費を費やしたるも敢て
惜しむべきに非らざるなり
費の三分の二を要し、完全に成績を上げ大礼
なる中の大礼を行ひ、ことを観あるい者は
きまるべきなり
而して、国体之を由義するものの
悲しむべきの世、大儀のことを知らざる者多い
録す、大礼御儀の詳細に新たい京都御不ハ宮の
もとなる大改革の御海基の一書と共に、
来叡之の紫宸をもきを意とする

○今次の京都行第一は山を始めの金次太郎を○を同
和泉屋の友人西村一夫氏に誘はれて日活撮影所
の撮影所を一覧する事、西村は此の人の
重役なるが故に撮影の一切を見せられた。撮影
室の大規模の一切を屋内に於ける撮影
とは実に驚くべき程の規模である。此の撮影所
は三ヶ所に撮影所あり、三ヶ所の撮影中なる
故に目を驚かしたる程の撮影所なり。
を殺害したる場面なり。死を覚悟の不良少年
白衣の婦人来る。一方に到着し一人起て刑場
に行かんとし廊下を経て歩を運ぶ。所観者を
して感慨に堪へざらしむ。廊下を八錯人数人あり、

善色）の劇と異なる点無言にて表情を為すことに
あり、恋ばく撮影を為す。特室を設けたる
ます。他の一日撮影（廣告を着装する所）
数回撮影を繰る。しかれども成功せざる所多く、
此等は昼間は明るき昼位なるも此の撮影所
の外部の小数千坪の敷地あり其の周囲は草
表あり家屋あり、時代劇に元禄の頃又くと
り、金五郎来娘に浮世の月数回映画を
各所と見の者、撮影不良なる所多し。
也、此の所と離れ具と入れる所なり、活動写真
る小道具と入れる所なり、活動写真
まる活道具なる小数を数を異なるも比る実に

また百端のこの弦人と情いたるまで、宛かも冬籠の古道を風を一所に凌合したるもせき敵まで、
先の情を見るもまた無しとなるの間仕の娘まで彼の
八映書に拙味あるもの、揚巻中のの優つまを
娘の知るものあるとの詰めたる郭
屋を訪き又八十数名より裾作まで化粧
を凝らしつあるなり。
○御大典に際し何人も人氣を惜しまるいまだ元
帥にあつては。去東ひ元帥を見る機会が無い
でのもまるべかり。京都ひ元帥を見る機会は北橋
会ひ日本の森立の藝に接を得たる
八七人にあり。しかも神戸の人京都人さん

人氣の集まる事は如何ばかりか、元帥の有つた社会
八金が平素[illegible]今[illegible]も御つた三条の大文字屋
[illegible]今[illegible]元帥が出[illegible]した揚上の三
室の芸家族を[illegible]自分元帥の清
都中の逆流かりう生北元帥の出入る群
衆通路情を交うて或る庭一時を過きて御
[illegible]の如きハ群衆[illegible]元帥の
[illegible]を待つて元帥の自動車を降りし
大文字の踏込に入るときハ一瞬にして[illegible]
喝人の[illegible]の娘[illegible]三条寺町[illegible]家[illegible]
の既も[illegible]

○京都に於ける花街は出来た花街は市一番の名
花街は割烹屋を先に出でたるが今一番の
大丸主人に招かれて府廳前の柿傳と云茶料理
に招かるる、料理屋中家の割烹屋なれども出前をも
とし家に来を入るることろうしれり此度は
つの家を深き好とそこに招うる等、茶室
に持参を喫し接上に酒肴を供く、南の方人物
に言を用ひ好らしく調理明る精活にこれ不
此日大丸主人夫妻の外に夫人の実家の父母も
来席に来る、夫人の実家は紙屋の人にて好生物
一とせ、北人幼時名うの人の家に育ちの人と好後
こ其の先代の亀大郎は余人にて、其日亀(亀)は

樣原製

玉井氏にて其の先祖なる人にて、余は友人にて、余は
此縁故深けれど、爾来初めて也、好一は京都の清流
の校に入りて校長人にて深川の家に
て絵画をよくす、先代も河村雨月を
南画をよくす、北人の画は豊麗も無今なる
と云へり、北席主人の画七人の内不村の
人なるが故に紙後ばうち志きうの清も、先が
ら御見に来るの思をうしに為め一番の興を深
く。

書斎寺境内の霧雨は余の友も好き家なり今次
七二月まで行く、一回は庭合を住席を浮来弥に
友人に招かれて行きたるに内子寺なる

の表)雲すあらんとするか二回目は金子入りの新聞
三人を席を銭形の石穴から(続いて)海を見る
の席を占め(表)雲すきまなく縦まこうから見つ
笑しけり、いつもこうなる来る為と一九は
也と美こ極酒会を共にしたしと思の情を楽
し得さうしれ今次美を果し得ざるは任酒美
会らもも云んるん此上ちを同じ場所を同じ
を会しけり、北家の刻意に就ては物と細説を
要も新、但此京都特有の河豚の油現は数々
口さんが飽くの試あり、北義に極為なるの酒の
無口と為せるあり
大方振り山泉の平八郎なるも行つて、面顧すんば

初夏のここの来りけるは三十年前の春に属す昔し
なるものの性質を選人ひ性を定め以ども、多くの生
表主婦さんと同国市世めき、飲食も重箱と
下物を入れを出すの野菜はいろく、例の特色あ
る瓶子は出るも、会物は好る美化し、美の
の料理屋と変る所の宮寺大仏
しけり。但此席と酒会を運ぶ世みは敬を
有り、カスリ木綿の前掛をあの、田舎めきこそ
所のかの子等の気質なるあり、京都の人なるあり
世の中の有る顔形と侵め、腸の国主と
優の前垂の先方をと仮細と訪ぐ此るも時
る取りて一風を流くこの美年ここの来りし時

その粉に清水を一双の瓶子を持ち帰りしことあり、高瓶子は今の家に存ず

田山谷を八坂神社附近と為山花と唱ふるを創立する家あり、ここも昔は祈くこしを供物の多数なりしとす、如此きの名料地を得たりとて、ここの祠記も物に拘泥せず試みに名付けて住吉を岩倉と名づく。かくかく銘と汁津山と称する吸菓を和して意味あるいはゆる果かなる汁の上にスミは鹿ゐすくひ元つて生姜の汁を交ぜて吸物と充て、ると吸菓は酸を利したるもの、文明めきたる不思議の事と口こちなし、

京都清水寺の名産の一つなる力子と称する饅頭菓

橋原劇

附近の新京極の名産）を元、終に錦小路の市場のとさ（ぐ、ここ、八百側飲食物の名を高家養を別格為に吸菓を如き三会のあ（ゆ）ゆらるるを、中の東京人に元慣れぬものもあり、差ひ吸菓の試嘗したきものなく、軒菓と拘泥くしけるのそき

ここ八百ちの仕かたを、海苔芋や、がンモどきや漬物、あば、里、砂糖、修ニ味肉まで、鶏を、充分初世帯を持ち新のことく、銘を味の色つるを推けて新食に慣くの、まくを試合して、酒を化すけるハ、京都中の一味なるし、海苔芋ハ大口を言ひ、ひ家国に培養ちんとも、蒙に東京まも新ち慣くりなり

の久しく出藍を望みまゐらせ候の機を得さうしい
来本願寺所属の拠敷邸宅、其地住寺と離
さゝ、一イ程の高さあるも苦しい新たに今の所の兼
中さう、北庭清城国と云ひ、山陽の泥陽の侍
数首あり、寛永年中山崎の上人の考へ徳
川家光が小城を造営の比所と侍く
西中の十二景を名を命ずる石川丈山の兼
ねうと云ひ、往年家家の主人ここに拠
かんで船遊びをしたるの流を少へしこともあるの
び、紀摸の頃る大きうあと宣者を施せる故
東の小紀摸むのうのあつた。風致い最も池中
の西屋曲の山を仕つれあるうあると思うれ比の今

樣原製

私が自在びあるから自紀の姉かあうて、市中のえん
の不かあるのを不審と思ふれとあるの四季の
拙も可うも巧みの拙拙さんとある其目を奉ん

傍花渓　邸月池　臥龍亭　玉松塢
侵雪橋　紫霞亭　偽仙橋
復拙亭　激拙亭　梅廊　用拙流

び比、桂の離宮に比べ甚比べ見りする
と、所の小細工かの所ハまうしい、世界其
ハ見ると得さうと比べ庭の割合の廣大と
思いん比の本願寺が武家の西雅と隔つ
ると之を手放さるのハ宮内の不思議び

○今次の京都行の心寺を訪ねた例のことゝ焼肉を
歩しと共風致を賞玩す、例の佐久間象山の墓
を拝して後、石田三成の位牌の存する塔を訪
ひ此れも三成の墓を展することを得た、焼肉と
壽聖院といふ子院あり、東京の太田虹村氏の
の僧と交ある関係から、話をそれから生憎石塔
りしも、妙寺石のうち道すがら仏壇のある家
ニ寄れば仏像の左側に教基の位牌あり、
陽石田氏の墨位と云ふ、許を得て一基三成の牌
をえり出して、裏面に
江東院殿正峰因公大禅定門
と刻せる裏面すい

慶長十年庚子十月二日 治部少輔三成
とあつて、もと極美なる格式ある位牌なれども、他の石田氏の
位牌も揃つてあることゝ疑はれる所から、ここが墓の墓所
であることゝ疑はれる。一説によつて
墓所に到り見れば、極めて小形の高さ八寸許
の円型の墓碑である其内の一が三成のものと
云へと引に到り、刻字も
印のみを存し、ようと覚し、石田の三成の墓い
他にこれ程のものは、地ごくまれ
ハ後の仏像と称するものを印ちて高時のもの
ちるべしと思はれる。後豪一取地に塗れもハ蓋
薄い、まれに感慨禁じ得さるものがあつた

○過般京都に渡り、父方振北堂の菜廟を拜し、菜堂の感を新たにせり。近年寶物殿を造営し多くの寶物を陳列し、殿觀に便す。後起給卷三四巻の高麗列聖文殿と書かれて納められ一巻は、往年大隈侯が一覽して感慨を寄せられたる、菜公の北の納卷を潜花の高義を、樂翁の遺蹟を、菜公の筆と相似たるものあり、何人ぞや。大隈侯の筆跡は、菜公が所感は恐らく樂翁の筆と同じきものを得たるか。自今の菜堂は北の俗堂のうを安き一巻又人こと如し。今次の旅を果すを待ちて寄せ一覽するを

樣原製

とす。亦北宮に相浦武四郎が皆面に敬寄の地圖を刻したる鏡を納めあるを安き一巻又人ことを思ひ出でたる。

陽堂が、

実は相

浦の先

輩が、

菜堂に

あること

は如何

北海道の

ことを得

◉輿地圖三大鏡　當社に特に鏡を奉納することは昔からのことで、大鏡も多い、大床の八菱鏡は三尺六寸で當社大鏡であるが、直徑各三尺二寸の三幅對の地圖大鏡は甚だ珍しがられて居る。この三大鏡は各其時代の地圖を殘し、又各時代の造鏡術の實歴史である。

一。日本地圖大鏡　加藤清正が朝鮮分捕の木活字と共に奉納したもので鏡師は天下一木瀬淨阿彌。裏面の日本地圖は本邦古圖の一である。四乳に桔梗紋、其上に豊臣氏の桐紋がある。朝鮮の役に太閤が己の身代りとして清正に持行かせたものとの説もある谷山復卿

二。日本北邊地圖大鏡　贈從五位松浦武四郎の奉納。松浦は維新前に度々蝦夷樺太を探檢調査して北海道拓殖の基を定めた人である。地名も氏がつけたのが多い。其記念に此邊の圖を清正の鏡と同大に製つて納めたのである。地圖の上自書の歌。

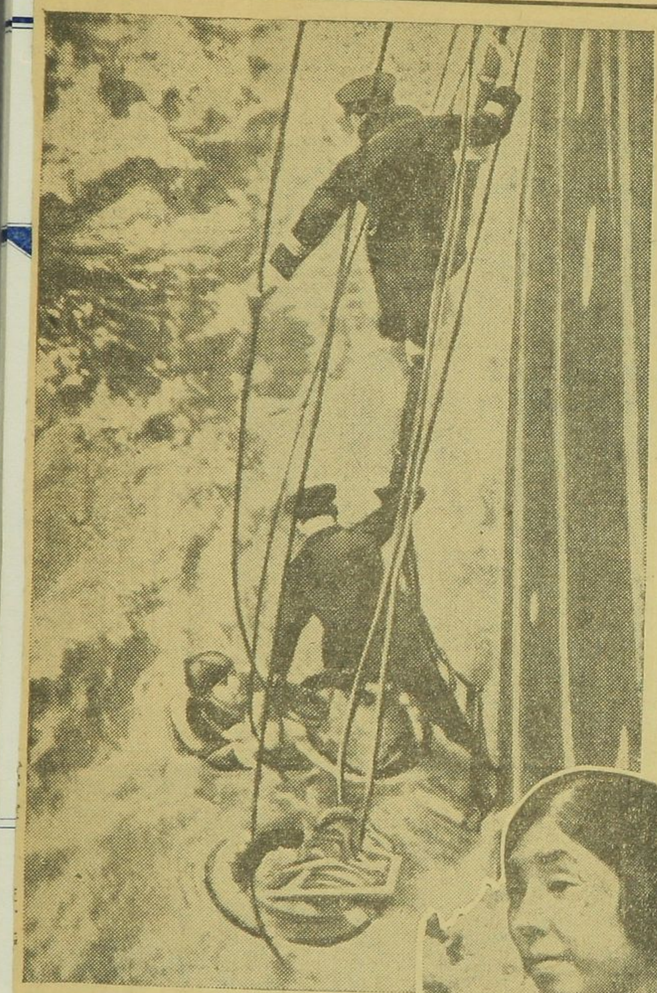
幾としか思ひふかめし北の海道びく迄になし得つるかな　明治七年五月吉日

三。日本西邊地圖大鏡　勳三等本山彦一の奉納である。徑同寸。明治大正時代の帝國の隆運を祝福し之を永年に神前に誠さんとの志で奉納したもので滿洲朝鮮から臺灣南洋を圖してある。圖案は香取秀眞。鑄造は大阪砲兵工廠が鏡師西垣元三郎を顧問として特殊鑄法の新しき試をなしたもので、水銀研をせぬでよいのである。鏡背自署の歌。

大海のつゞく限りは日の本の光を仰ぐ御代となりにき

洋上の呪ひ

井上中佐夫妻遭難状況



【上】ヴエストリス號の遭難者がヴアージニア岬の沖合に數時間漂流の後貨船ベルリン號の艦員によつて救ひ上げられるところ【下】ヴエストリス號の遭難に際し雄々しくも夫君の死を護りながら日本婦人の亀鑑を示し全世界を感動せしめた故井上義雄中佐夫人

北。松浦の光亮院殿のまの納鏡に倣うたものかし、而して直時本山大路の社長が近幾も日本地図を刻し、鏡を納めたるの二尊幕の鏡を踏みたるを過ぎ一さえと共の思ひつきに駆る可也。三鏡の倚をまし列と、八八中の状あとを。

○直時悲愴の死を遂げたる井上中佐が公使として赴任の途、雄飛と死したることを、夫人が良人の死体を護しとる状列の拳に欧洲人を感激揚らせたるは、日本主義尚ほこの様なるを見る、裁判書の北良材を乗まる奥、幸ひ

複原製

○[illegible]人[illegible]余[illegible]一二の句を[illegible]
し今の無し、次者一句を[illegible]
[illegible]真時池中[illegible]時
床に[illegible]可也食指動く遂に[illegible]入る

蒼に林霧暗茅茨閣に[illegible]微薛惟好向
田家占水旱復惟華[illegible]雅官私[illegible]
風暖月芳草池塘雨過時也自詩腸[illegible]
吹春烟何光[illegible]

蘭性

柳達[illegible]

○大嘗の本義とのべ[illegible]
八近刊日本及日本人[illegible]載する所[illegible]惟み祭

典の形式の残骸を存するに過ぎざれども其根本に潜める意義を存することの明かなる大嘗祭の如きも亦古義の大なるものありて存するものあるを見る。

▲『今回取行はせられたる、即位式に附属せる大嘗祭なるものに、抑〻三個の意義あり。その一は、此の儀式を修せらるゝことによりて、至尊は始めて日の御子として現身せさせ給ふものにして、是れ實に天皇御一代中の、最大にして且つ最難の苦行に屬す。之れによりて日の御子たるの資格を得、眞床を排して出で立たせ給ふや、此時、天皇は明らかに人神に在まし、恰も天照太神の天の窟戸を排して神姿を現じ、國土を照らさせ給ひしと同一の意義を有せり。而うして、此の古儀の由來するところは天孫、天津彦火火瓊々杵尊が、天祖の神勅を奉じて、日向の高千穂の峰に天降りましませる際、天の雲路を分け下らせ給ふに當り、『眞床襲衾』を被りて、苦行に服せさせ給ひしに出づ。故に往古においては、大嘗祭は、之れを即位式の前において行はせ給へり。聖體、先づその苦難を修め給ふの後において、初めて皇位に昇らせ給ふの意なり。是れ、即ち大嘗祭の第一義なり。故に聖體の大嘗祭を修させ給ふに當りては、群臣皆な齋戒を嚴にし、以つて天皇の修業に服すべきなり。若し此の間に在りて、或ひは安逸に居り、或ひは謹慎を失ふが如きものあらば、その罪、實に死に當れり。』と。

▲又曰く『後世に至り、意義漸やく移りて、主として、新穀を祖宗の神靈に捧じ、國土の安穩を告げ、即位を宣べ給ふの儀となり、又た米を以つて國魂とし、之を守らせ給ふの儀となれるも、根本第一義の存するところは、天孫降臨の『眞床襲衾』の古事に由來せるものにして、その淵源の悠遠なるを思ふべし。』と

○先頃学校の教科書と称する書物、流行字都宮県ハ曰く伊藤公の家に公の手書に係る大隈参議同今年後と関する建白あると、余ハ之れを信ぜざるも、しかも其後学都宮県ハ其の写本を士族に送りたるものなり、其源前と橋本ハ博都宮と流行字後者なりと雖、其の原本を見るに一頁七行本にて用紙と詩歌の輪廓あり、四君子の図を添へ、罫ハ朱摺也、印刷数二十八枚横佃堅吉の手書なり、陸軍省の印を使用したり、書ハ楷体なり、伊藤公の自筆なりと欺かる、巻頭に左の演説

を見る。

右明治十四年六月廿七日三條太政大臣ニ
モテ
陛下ノ勅手ヲ以テ内閣一横ノ上自宮
之
巻首ニ建議の❶序文八行あり、明治十四年三
月巻議大隈重信とあり」四次に建議の一部（後
日発布する左の如し
第一　国会開設ノ年月ヲ公布セラルヘキヤ
第二　四人ノ輿望ヲ察シテ政府ノ要官ヲ任
用セラルヘキヤ
第三　政党官ト永久官トヲ分別スルヤ

第四　憲法ヲ次テ憲法ヲ制定セラルヘキヤ

第五　明治十五年末ニ議員ヲ選挙シ十六年

首ヲ以テ議院ヲ開クヘキヤ

第六　施政ノ主義ヲ定ムヘキヤ

第七　財政

通常ノ歳出ハ現ノ見減アリ、而シテ外務省ノ等

ニ減ラスルヲ以テ小児ノ日ニ就テ除ク或ハ新

ラシムルコトヲ得ン往年前島密ノ北海道建議

ノ言ヲ用ヒラレシコトアリ果シテコレヲ用ヒキヤ

如ハ今利スル能ハス何ノモ伊藤公ノ手腕ヲ

ラハ寧ロ事ノ成ル伊藤公ノ手腕ヲ

ハ北海道ニ於テ北ノ護衛ヲ

○海ヲ隔テ琉球ニ位スルヲ

○数ノ前ニ米邦武ヲ俗世間ニ招キ一夕

の宴を張る、谷干城ヲ始メ、来会者

へず、唯平素ニ聊か親交ヲ

日今ヲ以テ帝大早大ヲ以テ谷ニ対シ交ハ

りあるこのうち二十名ヲ出席ス、坪井九馬

三郎塩谷温大森金五郎里枝勝美ヲ

顔触ノ如ク、谷早稲田大学ニ関係アリ、谷ト

交接スルコト密ニ在ルトアラサルハ必ス余ヲ

リ、谷ノ語ル所ハ二十数年前ノ事ニ属キ

りしかとも、教授連ハ皆、谷ト学説ヲ異ニ

辞退セラルヲ如シ、実ニ学ヘシ、亦谷ノ

直面して余は、前と異派の術に向へば、前の術派
派の筆と充て筆を変へざるべからず、殆んど
を描出するに困難を感ずるの場合に至るべし、但し前の術派
中、余をして再び新たに研究せしめたるものは、故吉田
知恵に関すること也、吉田の術に交りしの吉田が
早稲田の事に接し、後と思ひおるに、吉田
して、余が家と信交厚く、時代を異
にすることの如き、余が家の青年部
なりて教育し、余が家の青年部
断の術を久米邦武に示し、之を習はしめ一
二の助言をなすことを許さんとす、尚ほ其
時は田口卯吉君が史論と云ふ雑誌の史

論を連載する際、吉田は余が家に寄り
後生の名を以つて毎月数回、論評
を余に求めしが、後生は俗上に掲出
し、丈吉時のことを
思へば、吉田は
つて史海とつをこ云ふ
文を出して巻を
を持ち行かせ、故
を更に改めと称
を見ん心、恰かも清記
を引用して
有すること初めて
論を連載する際、吉田は余が家に寄り
後生の名を以つて毎月数回、論評
を余に求めしが、後生は俗上に掲出
し、丈吉時のことを思へば、吉田は
つて史海とつをこ云ふ
文を出して巻を
を持ち行かせ、故
を更に改めと称
を見ん心、恰かも清記
を引用して
有すること初めて

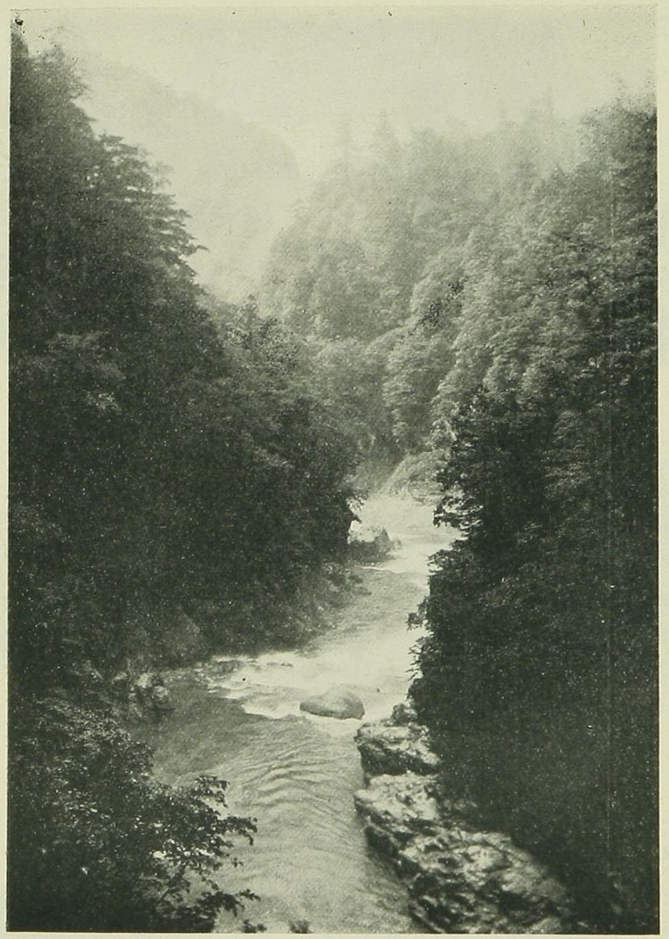
其雅趣と北国を載せ、亥と初めて雪報を伝ふの料とす

○岡庵に於ける高の別荘と一つ橋時代の大学の同窓にかゝる、同窓会に時を偲せどる同窓の人と招かれて集れる者一人も欠けず出席す

佐藤三吉　土方寧　菊池利喜太郎
柔田鎮次　砂川雅峻　[illegible]
石川千代松　石原健三　田中館愛橘

余

主客係十二名なり、余の如き高の別荘の主人なるに拘はらず、別名を石松と称せり



もみぢの黒部谿谷　　山田應水撮

東京製

業に興を惹き始めもかからざりき、出産前の赤
年長の男子なりしを古稀を二つ(はたち)き他の
古稀若くは一年前後なる古稀と呼んとする
面白きも其業を積み重ねんが七十歳を越ゆ
と誰のかい云ひ出しし一笑一笑なるべきも、因
なるべき因なるべきかは作義三郎氏を往
年高田公園に新築せし新流廣場なる
関係なる特と拙うんとなるべんと交りあり
人也往年柳橋の名妓清吉を引きき
なる折も作義の出産を席し祭り、自分共の
子を想ひ起し、あの頃の清吉なるべきなる頃
と見ゆるが作義君を圍んで居るのまま紀

てロクエの居るまへ他居こどんなどの宴あるや、
を祝ふとまたもちろん、賀(ほ)を祝ふ陶と作義
君い老へて居るの思ふ、なるべき、実ハ
あも習慣なる、特淑を表ち祝ふ加なる
左まれ新年なるべ、説と呼くまた
び喝采しなとこ山すを説けば別世の面白金
と同じく記臨するもの数人あるて、西洋ハ
トワイス、エ、ウ井ークの格言あるを決するもあり
古稀とるるの無能も数するも、あり、土云ハ
友の元国を居るる。多くは有賀の三四
を数へて満情の協賛を得、作義ハ元気を入つ
い若い女を扶手なるまんば無理かおこる、髮と

年の老ひを對手とはすべしと江喜をしれのび、
中すへ内々にしが添義を皆くとを帰やあるを
田中殿に就て立寄やり肝油を四合ほど中の用
ひるとの意の身がまく細人とそうを番
後猫身をつけおるの先を筆に悪ひさる
かるくしと誰れやらが石川を顧みて生抜き
者次しめすとなると戦ふもあり、砂川の頭
髪の黒きを抱き人工をかくしたるまや
と読んに頭髪の田中殿土方言四のごとく
純白とるんいえんびにらけんと胡麻塩の人工
を見るとすといい砂川の黄しき自白也、石川の
頭髪が赤色を帯び長く延て墓りそうなる流

けつらず、面顔朱を潮に異風とて伝ふ
尊敬すべき風来と称ると中すへて七五
して地男徒の日本人のあるとと解釈をえ
或るかしーの女給から、あるいは日本語かと
かりまるかと年増の菜雷様は一笑話も語るもあ
り、兎角かましめの話の湯くに同じ合の事
るか、他人の家を存ずる事無用は聊う遠慮
七ある游び銀の二友を思ふ友を語ふ
あり、高谷命ちりう源氏の絵てある友人の就
て合ふ事実を指出して交換するもあり終
祝ふ数数言問新聞に就て論議起り、春浮
十二方ふ往ての説を吐く四中伝に教ふ

羅

馬車輸入せられ今迄安易に乗りつゝ
ありし人力車の今と成りて人力車と
云へば忽ち立ちどころに手鞄をかつぐ
ものゝ如く中ごろメイプラウイメーの機械なる
役のへ必ずそれを排斥せ罪人を刑行
するの習慣ありと見へたり。余は之を注意して動
る余輩を弄ぶあるべしと思へり、写真機を抱き撮
影すべしと程遠し、寄席一人の客と主義を而して
なるが高浜一人の客と主義を而して
すを貴人なり後ろ向きレンズを入れるもおかし
斯て田舎を離れ行くの時なり、田中彼と石川
が靴の一件を互に驚き、停車場も漸やく

横原製

之のを見えしとなるを日高帝時代さるこの滑稽
なり
○新潟の人なる土地なるさるこの滑稽
と称する、楊柳古潟と書して又墓影覚醒
と書して無し、
○第四の市に例のごとく羽子板を售る、近代
徒に役者俳優の代りに スポーツメンの墨手の古
像を用ゆるあり、これもスポーツメン自身
の宣伝なるべきも、スポーツの紀則皆
くを問題起る、時代の表徴一端を見る
べき歟、

六朝寫本禮記子本疏義　一卷

（早稲田大学藏本）

一、故き書名撰者共に不明なれども

本書首部を闕し、巻尾に喪服小記子本疏義第十九とあるのみ。書の各篇の撰者は陳書の儒林傳に見ゆる熊灼の撰なるべし。

その字体は北の書中灼寫の字体と同じ。

その傳あり、それを援用し、灼少時より業を皇侃に受け尤も三禮に明るく、家貧義疏を鈔し日を以つて夜に継くとあり。其師皇侃の禮記子本疏義を鈔するを常とし、灼の懺補を加へたることを疑を容んず。皇侃の禮記義疏は早く支那に亡び、今日本の

僅に古抄書に其書名を存するのみ、而して日本に於ても其書存せず本書の如き即之なり、日本現存の日本は禮記子本義疏四巻、梁皇侃撰と表、信西書目録には禮記子本疏西快と載す。疏義を義疏と為す異同いまだ同一書なるべく、義疏一時完本の日本の存りしことを知るべし、義疏八文部の者目録には高丘宿禰と可なるを知らず、然れども此書は大内の一部なること疑を容んず。而して著者を鄭灼とせるは自身となすものの如し。羅振玉氏は用紙を検して唐代の麻紙の滑澤堅厚なるを褐色なるを似すと、質鬆色黄西陲出土の六朝人書巻の紙幣如此と云ふて六朝紙と断ず、書籍

る初めも六朝の時徽宗とし、陳隋唐諸帝の諱を避けざるを証とし、此巻或いは初の手書かと云へり、本巻を検するに往々塗抹あり（時夢通）寫字の生の為し得さる所多き者原形の面目を存す、鄭

初の自筆書と見るの當るを覚ふ。本書巻子本二巻毛氏書名の上題に内家私印の墨色の印記あり、光明皇后の印なりと、此巻が法隆寺に蔵せられ（傳へ云）ることもあり思ひ合はせんから光明皇后の手に係ること

を領ずべき得べし。信西書目に二巻と載せる内ることも亦推し得べき歟、他の一巻は天化間こなるやは不分明なれ共吾等いまだ知らんことを願ふ。

○名家の草稿類の序に記すこの一冊を寄り一冊を
こなり以上の一二巻あり文書を
記のを中川徳基の蒐めたるこの一冊を得たり、
名家手書雑蒐と題せられたるものなり
内容左の如し

一 大田南畝自筆梅花 一枚
一 湖山漁夫自記小首 一枚
一 西本黄石跋 一枚
一 乙骨耐軒日本刀歌 表裏 六枚
一 峡府督学久貝蕙渓（偉左）墨蹟詩并叙 一枚
一 日尾荊山寫新 三枚

一　小野睡帆代淨國寺心書　三枚
一　蜀山人狂歌哥屏風　一枚
一　谷蔭月花の美なる詩歌　一枚
一　日　芳好　一枚
一　春海十五庭芳四圖　一枚
一　谷蔭孤華　三枚
一　松本良順墨海軍記　一枚
一　淺倉物堂　三枚

以上

○唐宋元明の名畫展覽會今が帝室博物館と東京
帝美術館に開かれたんが此事の人氣を惹し數

日間日延をするまでつゞいた。人氣を惹しとの事保証出
い、斯る大紀模の陳列い未曾有であるを、諸博圖
家及藝家の秘藏を遺憾なく出陳したまひしこと
支那名家の收藏と傳る逸品を悉く陳列
したことい前例の無いことで、眞に支那畫の偉觀
である、自分い日延の意味を
設を經たが、何故あミ迄も人氣を惹
さりしやを悔（この感あミ）
數ひ家も稀なる珍べき產
十を數くるまでに、殊に
ある。支那美術が如何に上代に發達し居たか唐宋
あたりの作品を澤厚紀元を下けしこ

るの威力があることを知らる。雄偉の氣象
が紙幅に溢れて人をして崇高の感を抱かしむることがある。力強き書
のあるのも當然とは云へど實に多くは難いものである。
支那の藝術家に恐れん入るのは書に長ずる人が多く書をよ
くする人であることである。或は經國の宰相風教の
學者名僧、文學の業を成つたものが尤も良品
であるのは其の人の氣魄や人格の現れたものであるが
理の當然とは云へど、支那を指れども如何なる之れを現
はしたるか。日本とても上代を指せば之れを似たるものあ
り、今代を指せば之れを無いともいはれぬ。

榛原製

を比較し来れば力量を指れば日本などは甚だ貧弱で
遥かにお話しにならぬ。但今更云ふまでもなく大なる國土
の雄渾の氣が生んだことを忘れてはならぬと感じた。日本
の南畫とは形似の接觸なるもきまりの氣魄と
もいふべきものがあるが、其の真に
報ぜんとするを得るの。起人的手腕が滅多に發
術に許さるべきも、支那の名畫に之れを許
し得べきものは少かずある、北の展觀は日本藝
術を啓蒙するの大なる力があつたる相當なる
追の繼承者に過ぎずして我画界を載せる大織作
なることを得ずとまれば北の未學者の大陸引
は長く記臨に留むべきである

十二月朱一の記

○頼山陽二の伜が出来て家督を受けたから此
花淵と云ふ隠居所に住んで大阪に暮す時里面まで筆が及び
奥様の人の真面目を書押しもする。彼れが書き人物
の性格を叙するに時里面目を遺憾なく得た
い花柳の趣味や秘密
子と日夜中風俗係と淫の乱れたことまで
感情を書き三井の内幕をば及んでゐる。
大体是迄の記事は書き方が人の前で
事実の余が絶筆の義務者が、いつぞや
過つた形、余が絶筆の事山陽を読んだ不義を
陽へ伝へあるとのやうな者さえ、父の伝記を
ものこと感じつゝある、今迄の意後ろ

を留まることが出来ないと云ふ、私と死んだ子供
を考へて、涙を流して外出出来ないとする為に自分が
行つた所、和吹の手紙を手にして、実に有難
いまつたくなんとも云ふて手紙が届いたとのことか
ら、自分合いを下さいといふから、お日様かい
からのの手紙の為用ひと云ふのを強く勧めた愛
けれどもかあるの実に有難い時自分合いろ〳〵用基の
手紙を勧めることを熱中して私は際に用ひ
主張の間に流れたのは、強く手紙を勧めるとの
此の彼を勧めかけることもあつた琳琅寺を
人が他人の横幕禅して和撲を入つた日一枚印
ち若年者数信を和吹とすしめを早稲田に寄

附きもとことい彼れが傷ずるもの多自
分が学のもとは材料を立つたのもあるの和吹は余
の事面の自業と為すの鉄道を買ひ居つて大
隈侯と早稲田にエライ鉄道家がおまるも
いるを私を称揚したことがある、丁度其頃の様
の集会が富士見町の大隈侯も出席
されたが侯は自分を顧て居ない工ライ
鉄道家だとうだと云はれた、まんだまんな
事を云はれるかと尋ねたら、先刻和吹が来
てそう云ふたと云はるるの、自分も二人した
ことがあるの

十二月廿二日記

和吹倫と高の沼子
高の沼子は彼れが方牡丹時福

浄の[illegible]僕[illegible]ものを移浄の政化主義を表ハ
す、時教を清心し[illegible]遂に果さいりし一事とす
[illegible]笑い福浄が大坂の法方を拒絶の時、僕とも
他ひ他の庭中、也番を以て迎えんとす
数那、辛紀鳴り乎太数の[illegible]、[illegible]
果ずして[illegible]自身の自白也 因満
[illegible]の後の[illegible]年少時代ハ[illegible]周囲
の頭[illegible]福[illegible]を[illegible]
ら及感を抱き[illegible]也

○定朝の図書寮と荒木の[illegible]
『疏果爭奇』の一書あり、余多く図書を蒐集
[illegible]北書[illegible]百拙生[illegible]

志[illegible]の[illegible]輯[illegible]所天啓甲子の叙あり、上中
下三巻に分ち、上巻に蔬果名図と数[illegible]小[illegible]
を載す、図ハ宋徽宋の[illegible]劉氏所[illegible]の図中
蔬神果神[illegible]の[illegible]を[illegible]す、中巻ハ百
果雑録、下巻ハ百[illegible]を[illegible]蔬
果に関する[illegible]を述[illegible]を[illegible]
[illegible]ものなり、巻尾に海屋の跋あり、文政十
二年京都書肆林吉兵衛[illegible]
[illegible]。亦是れ一種[illegible]
（十二月廿三日記）

日本に画時論といふ[illegible]あり、画[illegible]
下[illegible]を代表する[illegible]

るこゝろのみち如者の大意也、又こんな類てるよ
多きも一興なるべし。酒肴は餅餡等と働らかるなり
蔬果の論多き中にこんな類するもの也、蔬
と果とハ物も近きことなれ、酒と餅と性相
反するごとく異なり、されど近きことも
去程を争ハしもある板面に巧拙也
蔬果部巻の中に、文章老
如の也、表面餅論の元の意義也
と共通と異なるべし。
○大隈家と花園大隈家と海鼠をしたかい
大変の海鼠と海鼠を一てなり海鼠をしたかい
陽風低く、旦つ山中の人の大隈と海鼠を又

けすいとまが無のこと如何又也、又紫漢成巻の
海の栗なり、海の海鼠しも市二海の人の青面を
えらぶ、又大変の人間味を感ずるこゝろが
ありまた見えさるれ。多くの人間味上のこゝろ
に涙し、変と異を、を示あれ、変のお論と情金を
笑かんなりし此数の手間がある。中江弘義
かとの手紙なる百二るの金の巻を無者
ありてるのハ青田海鼠の時日に鰯んとかが今が
の海鼠ま福池が変身
あれ手紙がある福池が変しと後京の焦花が
手間の又福池の借用河人と番奥とたこと
如此のを大隈変のおを為ものあるといるを、詞

子ども達の教育に熱心なる者多く、福沢は何人にも長く
藩士として大隈侯の養育を受けたるものなり。福沢は
年すでに廿八人の助力を与へたるものなり。福沢は
なりしが原亮三郎の死後文部省の傳習所を及び印さん文
調子ともに千円の傳習所を及び印さんとも
侯の侯と寄付とを受けたるものも、此千円は五印さんとも
人を甚だしく感ぜしめたるが、侯
の御厚意なりとして礼を述べたるなり
る。小久保喜七のせきこみ侯の厚意を及ぼ
するものなり自家の心配者を訴へたるなり
もあり。但し北村氏の演説会の演説を聞きたる
説とのべき初めて政党に抱いた侯の親しき談

解が数しばしばこれを聞くことを
徳富蘇峰の書物に弱き者や政治の機密
つたことも多きが、生徒時代に弱んじたる彼
れが洋行する時に洋行の費を侯に借りたる
で見えに関する書物も多く洋行中新聞紙
の侯に関する書物を買ひ求めたるから三番目
風を持つ、其内容は
公無心物語なる、蘇峰の一時大隈侯に海外後
裏切りたるが、大隈侯は海外後
うに見えを分疏したる長文の書簡を送られたる
杉田定一のことを汎論の人からの手紙にも見る
ことがあるのと云ふ。えゝ金城河野ひろく

河内長中を内務に入れたことを深く感じ相延
の勤王の功を勤まり法にあるが主意の功を勤
まり制度を闕いてあるのを平生遺憾に感じたが
流れに主意宇相の通り流れ下るいわゆる異いなと
変を称賛とある。尚また満獄せいろく意
のあがるも知れぬ、手紙に微妙性を帯び
たるがかく笑んが保存さんとすると筆石もう
かくまけぬる大限侯が自身 十二月廿四日 筆
手紙も書かないのは、[illegible]
の恥辱の振口九番一外交官として海外にあること
三十四六年 内地にあることが甚だ多いため今
まで機会を得ることが出来ない。漸やく先生の御後と

なつかしく久方振りの文拝見致しました。
此度の新聞支部の公使渡者記事とて
つれの公論出でであつた為、東洋式の豪傑肌が
養と濃厚とをうく美が韓しも和歌が使徒
韓の時は、西洋の礼式に慣れるいのが稀と失策
とは、其の後和歌の公使の毒舌四方丈夫失人
は未国人びあつたのに、アメーリカ方から、
的は方、婦人を迎まる法なる仔細と数を受け
たが、一時のしどろもどろ西例に感じた、毒舌が使徒がある
時毒が口やましいのまで其の感情を漲つれ
かも知れぬとなれぬるの花、自分の肚の底
まいまで集注ぬが なつかしみおれる、十アトレ

風俗のちがふことなども氣をつけておらぬと笑くなる事が多いが、元はまづし方の使ふ者でもつまり外交官などはたいてい外人を見たものでなければ、全く見たことのない人ばかりであつた。横浜は長崎出身で金八郎の縁故と云ふ資を受けて出て来た人であつて、今の外人を事とするものは、早く死に別れた人ばかりである。ブラジルは日本本土の二十倍大の国で、共国が発見されてからまだ四百三四十年しか経ぬ若い国である。開けた方面は日本以上の文化を有つてゐるが、廣漠たる所が多いので、開拓の志あるものは無限にある。

我邦は人口が豊富で、人稠密の度合は世界一である。人稠密の度合を立てるに国の面積を以てするから、日本人が住んで住みにくいのよりの国土がある。西洋諸国の移住者が多く成功して富豪になるのは、日本の移住者が殆ど成功しないといふのは、西洋人の移住は五六十年も経てゐるから、多くの資本を有つて来てゐるが、日本の移住は創つてからまだ二十年位で、貧人のみが移るのだから、外人の成績と比較するのは無理である。志が進と成績が上つてゐるから、五二十年の後には著しい成績を期し得べきである。日本の知識階級がブラジル

これは医者でも学者でも非常の優待を受け
俸給の如きも倍数以上に上るが故に斯る有利
なる不平等条約に対する彼等の譲歩ゲラ
ジルの四港と通商するといふ條件を提出する
から面白い。北国の家畜の田数は多いが、一面大
しかストーエ[illegible]トの輸出が重大なる上流
社会に支配されてゐるもの。

○生糸の産出高及び輸出高は日本側の
出品が多数を占めて居るが、何人も新のつくる日本
の名家と競争して名声高いものが多くは北書系
に属するものがあることは、こんの茶道の関係が
多く僧侶の入寄附金に関係がある。重れ北書

を学んでいるからの事で、其山取引の如きもこれ
を学んだものである。牧渡などの俗がいとく孫色さん
火の如く、今日の海列を見ると明らかに日本の現状
が世界に優れてゐる。

○ことかハウキリ[illegible]ること
んと新聞相見者が書面に新聞紙
書いてゐるからそれをこゝに抜めて自分が紫
説する。

因に記す名書の輸入総数三万六千一百
の内支那側の出品は百五十五点、日本側
の出品は二百六十一点である。支那側出品の
多いのは、けんもの逸品多い家である支那
側に於ての。

ところが、日本に於てのそれを觀察すると全然相反するものがある。日本へ支那畫が輸入されたのは古いことであるが宋朝以前、卽ち藤原時代頃以前のことは暫らく措くとし、最も多數に輸入されたのは鎌倉時代以後、主として足利の初期であつて、それが現存するもの〻大部分であり、隨つてそれがまた坊間支那畫に對する鑑賞上の先入となつて居るのである。そしてその輸入されたものは如何なるものであつたかといふに、それは北畫系統のものであつたのである。當代の支那畫壇を顧るに、そこには當代風のものは勿論、董源とか或は巨然とか、その他幾多古南畫風のものも行はれて居たに拘らず、何が故北畫風のものゝみが輸入されたかといふに、それは入元や入明の僧侶等に依つて爲されたからである。と言ふのは、宗教上の附法の爲めには、先づその主僧の珍藏を第一とする。次いでは羅漢の繪といふやうな、さうした類ひのものを將來するのが、傳法上最も必要であつたからである。隨つて鑑賞上に於ても、亦同系統に屬するものを將來したのは當然のことで、斯る結果は一般から彼の地へ注文したものも、同樣のものであつたことは、これ又自然の數であつたと言はなければならない。彼の牧溪の作品が多數將來された如き、それは茶道が勃興し、東福寺の聖一國師が入宋して無順禪師の室中に入つたが、畫僧牧溪はその同門であつたからなのであらうと想像される。又以て言説有無の一端を見、二種

くはなからうと思ふ。

斯る次第で、日本へは主として北畫系統のものが輸入され、以後も亦なほ盛んに輸入され、斯の東山殿のギャラリーの如きそれに依つて飾られたといふ譯なのである。そしてそれらは漸次散逸されたが、なほ暫らくの間といふもの、武家及び茶人等に依つて傳へられたのであつた。然らば日本へ南畫の輸入されたのは何時の頃からであつたかといふに、德川期へ入つからのことであつて、それも眞に鑑賞され始めたのは中期頃からのことなのである。そして當代輸入されたものには、南畫の本流卽ち元の四大家とか、降つては淸の四王とか吳惲とか、さうした人の眞蹟は殆んど無く、その本流の眞蹟に接したのは極めて最近、嚴密に言へば明治も末頃のことなのである。それにしても、元以降支那は南畫に傾いたに反し、日本では北畫が尊重されたといふことは、面白い現象であつたと言はなければならない。隨つて日本の鑑賞界は、北畫系統のものに對しては傳統的に鑑賞力を有して居ると言つて宜しからうと思ふ。然しながら、美術史的見地から鑑賞する場合には、いづれに偏するのも決して當を得たことではない。それが今回の展覽に際しては、支那からは殆んど南畫系統のものを、そして日本からは主として傳來の北畫系統のものが出品され、それらのものが一堂に併せ陳列されて、美術史的に偏頗なく鑑賞し、且つ又研究することの出來たのは、極めて結構なことであつて、何處までも喜びに耐へぬことであつたと云はなければならない。

支那名畫展を觀る

松嶋宗衞

日華兩國風雅人士の珍藏を門外に出して未曾有の支那名畫展覽會を開催したるは實に一大美擧と言はざるを得ない、昨年の初冬十一月二十四日から十二月十六日迄、上野公園東京府美術館に於て堂々たる其建築に相應はしい唐宋元明名畫の陳列を見たのであつた。其陳列の繪畫數は實に三百六十一點に上れるが、支那側の出品は百五十五點日本側の出品は二百六點で、如何にも空前の一大支那古畫展覽會であつた。斯る多數の支那古畫を一堂內に觀賞することを得るが如きは實に稀有のことで、支那に於ても日本に於ても殆んど空前（或は絕後かも知れぬ）と言はなければならぬ。

大體に於て日本側の支那畫よりも支那側の支那畫に優秀品の多數を占め居れることを否定することが出來ない、これはどうしても本家本元の支那側に於て逸品妙品を收藏し居れる人士多くして、日本側は勢ひ十數歩を讓らざるを得ないからである。試みに各時代別の古畫を鑑賞して聊か研究批評の一端に供したいと思ふ。先づ唐畫に就て言へば梁鴻志氏の閣立本歷代帝王圖は有名なるもので何んと言つても神品に推さなければならぬ。之に比すれば關晃釣氏の閣立本秋嶺歸雲圖は到底同席に置くことが出來ない、若し夫れ山本二峯氏の吳道子送子天王圖卷に至つては、全く明末頃の僞作又は模寫品で唐畫などゝ見做さる可き代物ではない。要するに出品唐畫八點中眞に唐畫として敬意を拂ふ可きは漸く一二點に過ぎない而も一二點の唐畫や一千二百年以前の古畫として世界的珍品である。

宋畫として出品せるものは七十八點の多數に上つて居る。則ち日本側が五十二點の多數を占め、支那側は漸く二十六點に過ぎないが、而も宋畫としての神品や逸品は日本側よりも寧ろ支那側に多數を見るのである。黑田侯の李公麟維摩圖や馬遠の山水圖、岩崎男の夏珪江頭泊舟圖や馬遠雨中山水圖、秋元子の夏珪山水圖などは名畫として最も有名で、且つ日本側の代表品である。王衡永氏の許道寧秋山行旅圖や、丁士源氏の崔白雪雁圖や、靳雲鵬氏の李唐秋山行旅圖や、方若氏の馬麟紅梅圖卷などは、支那側の代表品として稀世の珍品百世の名畫なりと仰ぐ可きものである。日本側の五十二點中四十餘點は頗る疑問の宋畫であるが、支那側の二十六點中十有二點丈けは確かに宋畫の眞蹟である。則ち宋畫七十八點中の大多數は疑問の古畫として研究を要す可きものであるが、其の二十七八點にして眞蹟たる以上は實に古畫の逸品として珍重せざるを得ない。從つて斯る多數の名畫を陳列したる展覽會は、東洋文化の精華を示せるものであらうと思ふ。

元時代の繪畫は七十四點の陳列であるが、內日本側は三十點、支那側は四十四點である。則ち宋畫に於ては日本側の出品多數を占めたるも、元畫に於ては支那側の出品多數を占めて居る。元畫は支那畫界の最も全盛期を代表したるもので、

支那畫を代表せりと言ふも不可ない位ゐである。支那の風雅人士が爭つて元畫を珍藏しつゝあるは、其出品の多きを以ても之を窺ふことが出來るのである。王衡永氏の黄子久秋山無盡圖卷や、關冕鈞氏の王蒙素庵圖や、同氏の趙善昌夏山讀書圖や、陳寶琛氏の曹雲西山水圖や、周鴻孫氏の王蒙青山讀書圖や、關冕鈞氏の方々壺山水圖などは、元畫中の逸品として稀世の名畫である。黒田侯の顔輝拾得圖や、德川伯の夏明遠山水圖や、蜂須賀侯の壇芝瑞竹圖や、山本農相の王蒙泉聲松韻圖や、井上辰九郎氏の劉雪湖梅花圖や、根津嘉一郎氏の孫君澤樓閣山水圖や、早崎氏の吳叔明秋山蕭寺圖の如きは、日本に於ける元畫中の逸品にして支那側元畫と共に世界的名畫に數へざるを得ないのである。其他元の大家倪雲林高克恭吳梅道人の如き數點宛の陳列ありしも、孰れも疑問の元畫たるを免れないのは如何にも殘念至極である。

明畫の陳列數は頗る多く百六十九點に上つて居る、此の内支那側の出品六十五點にして、日本側は百〇四點を出品し頗る優勢を示して居る。然れども出品數に於て優勢なる日本側は、其實質に於て遂に支那側を凌ぐことが出來なかつた。支那側の出品は殆んど逸品妙品揃ひにして、何人も日本側の明畫に對して聊か顰蹙せざるを得ないであらうと思ふ。十五點の沈石田を鑑賞すれば、黄峙青氏の山水讀書圖及び黄介壽氏の山水圖は、實に逸妙なる眞蹟にして他の沈石田は殆んど之に勝れるものを見ない位ゐである。白石六三郎氏の雪景山水は、沈石田の眞蹟として日本側の逸品に推す可きも、其他の日本側出品は殆んど疑問の石田畫なりと言はざるを得ない。唐寅の作畫として日華兩國人士の出品せるもの十四點であるが、此の内八點はドウしても疑問の明畫である。本山彦一氏の美人圖は一點疑ふ可からざる眞蹟であるが、其他日本側の唐寅畫は殆んど疑問である。徐世昌氏の唐寅歐陽文忠公像、郭葆昌氏の孟蜀宮妓圖龐萊臣氏の古木双鳥圖の如きは、實に唐伯虎の眞蹟として稀世の逸品である。

文徵明の十一點中、逸妙の眞蹟として擧ぐ可きは僅かに四點に過ぎない。而も日本側の文徵明と言へば、殆んど疑問を有するもので一として眞蹟逸妙のものが見出せない。關冕鈞氏の山水圖、沈瑞麟氏の園亭圖は、文徵明の眞蹟として到底日本側に見出すことが出來ない位ゐの逸品である。原邦造氏の徐霖四季山水四幅は、能品として珍重す可く、岩崎男の謝時臣春夏秋冬の四幅も、亦妙品として尊重す可く、王一亭氏の宋旭瀟湘八景八幅は能品として珍藏す可き明畫である。其他岩崎男の張瑞圖山水圖や、藍瑛秋溪幽居圖や、王建章川至日昇圖や、關冕鈞氏の傅山乾坤草堂圖や、李祖慶氏の文伯仁溪山仙館圖や、岩崎男の李士達山亭晴眺圖や、速水一孔氏の王鐸山水圖や、肅親王家の徐渭天池双壁圖手卷や、郭葆昌氏の仇英滄浪漁笛圖の如き、孰れも明畫中の逸品として、亦眞蹟中の妙品として、賞美せざるを得ないのである。若し夫れ明末清初の石濤和尚は五六幅の陳列ありたるも、一幅として眞蹟たるを許せないのである。單に參考品として陳列せられたりとせば、そは僞作たる參考に供せられたのであらうと思ふ。

○学ぶべき高貴の異ちがい、養蚕百数十種を英
のみ自ら蚕のかること多く、近年は用し文房
具をうつくしく方面を飾り、世界各国の
べ、ハ、かいターの英集を試む、第爽英
集と風俗を画するに一段味也、微妙なるもの、英国
各国のカラーあるもの、英国
其他既に十七八種を獲し、尚ほ倍を試す
るものあり、漸やく蚕の種類を
と伊太利先ずとも獲なり、生と木蝋なり
伊太利蚕の柄と華を以て包む華と天生
の人物絵あり、なほ伊太利の特色とす、蚕の
上級赤色のジャケツを着ひ明る表裏田国を

耕す国あり、これ又一見家国の風俗をあら
べし、日本さん北海のもの稀なること考へ
ることを要す 終

○春蚕集産と錦の事を書く時、英操錦を
及人ひ、日本の例を挙がし得ざるべし、偶と西
村真次の萬葉集の文化史の研究を読む
る英操帯の和歌が数首出てきたり、左又
その一節を抄録する

古代に於いては一種の英操帯(Chaututa bella)
かあり、互ひに用ひられたるものゝ如し。インド
子ジャ人のジャウアウ(Jawat)、英操帯
を用ひ、ある世性なり

ある。然るに宣長の歌論と現実と
来る下紐しかの男性の面影とされて
のえんを結んでいる。次きる今人なるまもれの解
かるの約束をしたものである。下紐がえ
るものを有つてゐるのかの合らるが、動もす
れば自つと解ける性質を有つてゐるから
いい。

筑紫なる香椎の子ゆゑ忘れちのくの
香椎宮の紐ひく紐とく（巻
を味つてゐると、陸奥の香椎の男が
をこびせこ結はれし下紐を、ゆるく
来も美くしいなと逢つた為に解く

ことをまつとしたのである。男性も貞操帯
としての下紐を結んでゐたことが知れる。
今下紐こういもの習俗を完全に為さる技巧まで
若干の歌を次に掲げる。

(一) 吾妹子しゑをーぬぶらし草枕
旅のまくらゆ紐とけぬ（遠
(二) 人見ぬ表をあまびて人見ねば
下紐あけて寝ぬる夜もなき
(三) 人妻はいふの雅かことさごろもの
北紐解けとふの雅かこと
(四) 二人して結びし紐を一人しも
なぬ解き見じ恋ひ逢ふまでは

(五) 海石榴市の八十のちまたに九たるらし
問い組を解かんとすれども
(六) 針はあれども味しるけれども若けめやと
妻を乞わやまし 紐の結び目
以上はもんの六例まで出さるべきが其後ついて
六段めを(二)は相手が自分を思うもの下紐が
解けるという兆があると信じたことを示す(三)
は相手を恋うる情愛の秘かに下紐を
解けて待つたことを示す(三)は下紐が貞操帯
としての任務を有つもあることを示す(四)
は下紐が相互に解かるべき(まぐ)勝手なる
百一をいうことを示す(五)は下紐の結び

を解くことは交合をひそかに示す(六)は久
しい間世と分んでもなお下紐の結かれん
ことを待つ心を示す(針はあうも逢えとうする
ことを業とす、恨み怨えをみる男の心を示
したもの)

○筆跡の格子を探えんとは色恋をうあ
るきーて、筆跡の筆跡みのもおもてる不況長
きうる筆跡、何かで拘束する縛人と池に拘束
を逃れんと、張しきるものとなり、なる風雅な
人しく逃ぐる者に、天皇なる男、門町の文の
者に別れ、何か酒の肴いうときやと(戯)戯れ
ばえん或いは気まぐれ、ものを出すもの

立程の為不ならず、ちゑがくしの西廣を
[illegible]あれ、さかうづくしのあれなら[illegible]あくし
終に維新の際[illegible]
[illegible]紙を[illegible]のあれ
[illegible]も[illegible]、成るまで珍[illegible]と一笑するが[illegible]
[illegible]子を[illegible]
流初年台湾征伐の国を[illegible]紙
[illegible]や羅馬字の[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]珍[illegible]
[illegible]
[illegible]

尾張の也有に[illegible]

らえ[illegible]入らさるしかたなくなりてそ
めくり合ひ仕[illegible]を恨くる、俗入二冊本[illegible]
世子と為する教訓[illegible]
と説き方の流石[illegible]
四章[illegible]
[illegible]
四冊を[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

十二月朱八の記

○[illegible]

河豚を喰む面々はあらかじめ松茸汁とかいふものを
調ふる世話を元寄せしもあるべし可きの面倒とかけ
なるの十人前とかいふフグは五つくらい分量多く往二
天神の大工三隆間なるべく盛りなるとかいふが先
から雪を寄せたんこと、汁に入れて煮る原間
もあめが刺身もあるべ、ヒレを焼き酒と和して飲
あべしとて、調理一切を客の目前にするが此思
を始めの式なるべし、彼岸は薄うけて此
二軒廻す、フグ坊主の一人いえの刺身を取って
調膳する鉢に入れを差出の字を書くべく
しもこれを始めの原しるべ、薬味の鉢の
ものを見もたれあるべ、汁うん二イラ

橋本蓉

を和するを可とするを注ぐの清人なり、皆々鼓
あてをあらかを傍観するべ、そうく真なり、元人
ものひと動もんとも不ものとつけず
君子不似合なり、新く来膳者は思いさう
しちどいふもあり、余不笑つもものく目を合の
指動くものを合いさることを寄る事也
何人を性といあり、元人教のを過ぬ去稀の筆
を迎ふ、地獄と隣と身を軽人は可けんやと
笑ふ。実い元人酒を多く飲む時は何れをも
喰いさるを例とす、ひとりフグの文献例の多
を為すを教せざる前

○菊多集と酒の秀歌とハ大体後人の酒

禮讃十三首のうち、いつぞや酒の歌を百
首書いたが、終に心つかず、之れを逸したのを
遺憾と思ふ

大宰帥大伴旅人酒歌十三首

験なきものを念はずば一杯の濁れる酒を
飲むべかるらし

酒の名を聖と賢人もしたる大き聖の
言のよろしさ

古の七の賢き人たちも欲りせしものは
酒にしあるらし

賢しと知らるらむ酒のみを誉めたるし
酒の名のよろしも

いはもせむすべせむすべ知らねども極まりて
愛しきものは酒にあるらし

中々に人とあらずば酒壺になりにてしかも
酒に浸みなむ

あなに賢しらをすると酒のまぬ人を
よく言へ酒なほ勝れるかも

價なき寶といふとも一杯の酒にしかめや
酒の上あんまさらめや

夜光る玉といふとも酒のみて心を遣るに
あにしかめやも

世の中の道にさからしくば酔ひ哭きすべし
ありぬべからし

此世にし楽しくあらば来む世すい鳥にも蛆にもなりなむ

生ける日心遊ばしめよ死ぬるのち名世に聞ゆ
楽しくをあらむ

もだ居りもさかしらするは酒飲て酔ひ泣きすべし
高坏かずけり

第五巻三 大伴旅人

大伴の旅人の弟の妾酒にあひてもうしたらしく兄の
十三首の歌きん弱る兄の病を嘆きたる歌なり
旅人が再生の日に酒を美しつれ、その美なる

古の人の賢さかしらする者の酒をめ
賢者は酒を好む

此の歌がおもしろい再生も酒に趣味があったとえ
ば、賢人ぶり飲めるいから、賢者も嘗きたいとい
ふ意を宮ものるのに賢者が役に立つとい
を伏せて、兄を下に渡す工夫をしたことである
からの

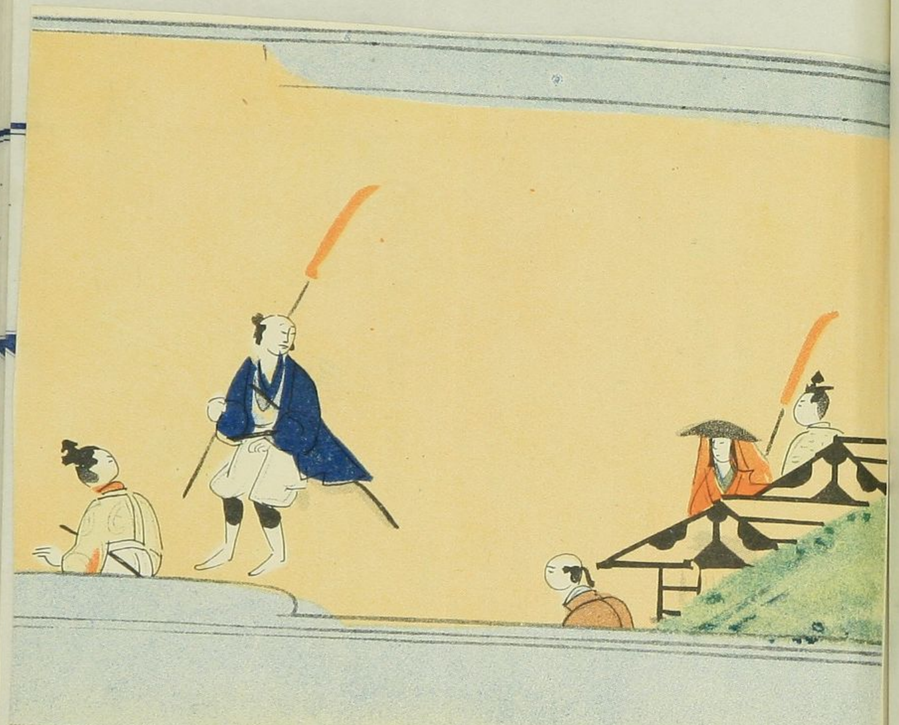
○芹川の汚穢を洗ふ人の働きもあると信人の言
の好き投ずるとの和らへる。美を貴族の隠と
上げたものの美人の

橘家蔵書

つて隠れもなき者いひ、勿論芹がいつ頃から食用
となれるかなど詳らかに調べもしらべられぬ筆
者こそ早く芹が食用となれるものなることを
知れるのみなる。天平元年の班田の苗
歌(橘諸兄)が山背国のわきをこから蓮の
歌(命婦)に歌を贈られし時芹を贈られ命婦
の礼の歌を
まうすらをと思へるものを大和国にも
かにはの田のに芹ぞ摘みはやす
とあるを以つて天平元年の昔より食用されたこ
とが明らかである。

○出版部の図書販売定価二四四九銭

人を流し大変栃やはり天皇の状況を祝賀
せしめられ所、共の報告と所得る天然
を全く失つたるを、信用こそ出来ず共産活動
を積んだ証拠なり、おを托すんば絶対に産
しもすまじ、自分らは進んで産らんとせぬ
共怠慢を詰んだ、何の方法方からの委托
がなくいのち心に任せぬといふことを横柄な態
度もあり、之れも共産の底とうつると活動
力が張つてゐるつとしてゐるから却つて強
果があるが、一概に先鋒を可とす可らざるとも
る新鋭の底の実力を詳察せざるを



奈良繪本「文正草紙」に就て

柳亭種彦の用捨箱に「昔は正月吉書の次に冊子の讀初とて女子日は文正草紙を讀しとなり、今もある大家にその古例殘りてあり此比さうし今多く傳り大本小本摺板の數あるも、昔は家々になくてか谷なはざりし冊子なりしが故なり。標題にいはひの草紙と書たるあ圖り是その證なりと古老の記に見えたり云々」とある文正草紙は、室書町時代の作にして何人の著作か詳かならざれども、文體惡しから館す且當時の上流社會の狀態を窺ふに足る一資料なり。この草子は所鹿島大明神の利生談にして、鹽賣の文正なる正直者鹿島大明神に藏祈願をこめて娘二人儲けたるが、一人は時の關白殿下の公達の奥方に、また一人は帝の中宮に上がり、文正自らは宰相にまでなり奈良御いのち百歳にあまるまで保ち給ふぞめでたき。まづ〳〵めでたし云ふ、大福者の話なり。本文の終の部分に「いづれも〳〵めでた繪き事のはじめには、此草子を御覽じあるべく候ふ」とあり。

奈良繪本は、繪卷物或はお伽草子等を假名字にて認め、其內容本」に隨ひて畫を挿めるものにして、其畫は胡粉、朱、綠青又は金銀文箔等を用ひ着色せる極めて絢麗なるものなり。其源流は繪卷物の正類にあるべく、其盛に行はれたるは、足利時代の中期以降桃山時草代に亘りての事なりといはる。體裁は横本或は縱本のものもあり「紙て、表紙は紺地を用ひ、其上に金泥にて種々の模樣、例へば、雲形、霞、草花等を圖す。本文に用ひたる紙は世に「問合ひ」と呼べるものに近きものなり。かく其體裁を美麗にせるは、達棚などに置きて裝飾の用に供せんが爲めたり。從つてこれを「棚飾り本」と稱せり。

橋原製

妹安子を思ふ

蒼龍窟の書翰

小西信八翁より互尊文庫へ

小林病翁の書翰と共に寄贈

東京小石川に悠々自適静養中の盤阪教育界の長人小西信八氏（長岡藩出身）は河井蒼龍窟先生が令妹安子の心得につき父上に送りたる書翰及小林病翁の病氣に關し友人に送りたる書翰を此度互尊文庫に寄贈せられた河井先生の書翰は河井先生の實妹にして此程九十五才にて逝去せる牧野安子刀自の三女牧野清子女史より小西氏へ割愛したる物にて清子女史が之を熟覽するとを詳記した自筆の手紙も共に貼附してあり清子女史の手紙によれば別紙河井氏の書翰は其前半を他に割與したるものにて之は殘りの半分に過ぎず是丈さへ今は保存しあらずと云ふ意味もあり又牧野金藏へ嫁したる當時は姑の瑤が臨分

難義か

つた相でそれを兄繼之助氏が聽々訓誡してあるとなどが推測出來るとの意味も書き添へられてある因に清子女史は牧野安子刀自の一番末に生れたる女子で當時は牧野家も家計豐ならず安子刀自は一荷を擔ぎて知り合の宅を廻ると云ふ。有樣で女子教育など思ふ樣に出來さるより清子女子の姉きも小學校教育さへも人並に受けさせるとが出來ず家庭にありて糸繰とか

裁縫の

手傳へなぞして居られたが同藩は夫々學校に入り教育を受くるを遺憾とし父母に强て願して阪ノ上小學校へ入學する事になつた其時女史の年齢は既に十八歲の處女であつて十二三才の少女と相並べて教授を受くるとなつたので同級生はお婆さん呼ばはりした位であつたが熱心勉强の結果忽ち昇級し優等で阪ノ上校を卒業し夫より新潟女子師範學校東京高等女子師範學校等に學び米國へ留學し

歸朝の

後教育界に身をおくに至つたが同期生の田中千之女史の如きも清子女史の學才と熱心と勉學には敬服し居れらる樣だ

家鄉を想ひ肉身を思ふ

英傑の心中窺ふに足る

現代婦人には好清涼劑

御兩親樣の御膝元を離れ、遠く御音もなき處に參り、此味わひ少しは覺えも有之樣被存、他年家に歸りて不忘ためにと、も樂みに奉存候。一通り女子の達人と唱候者は、針仕事糸繼文筆、口上向にて、是も女の職分、第一の事に候得共、掛る人々存外に能云はれざる者多く、是皆心の持樣より起り候儀、お安も承知の歟に候はんこそ淺山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん實に生形能に達し候は、分量も有く、登方なく候得共、心だけは一人の人に成度尚々御願仕候。男子にも候はゞ、供々出精可仕、女ながらも少しは氣象も有之樣被存候間、自分の出來ぬ事を慰め取入候得共、筆に任せ書始め終に此に至り候おすが（筆者曰く河井氏の令閨）の心得にも可相成と思召候はゞ是亦被仰聞候樣奉願上候。奚々も心を不通、何程はたらき候とも、悠然といたし候はゞ、一分の仕合は申迄もなく、一家彌々可感、乍憚宜敷奉願上候。お安へ申候意故自然文を敬を失候故、不悪御仁免可被成候、此度は先生の登り故、好便と存、大封を糊はす色々の事申上候得共、乍御餞而御一覽被下

候はゞ難有奉存候、書毎に申上候ゝくとき事に候得共、一家兄弟の安全、何の幸魚可過之、唯々夫而已祈願仕候。謹言

九月十三日夜月下に認む　總之助

父上樣

與々も私事は少しも御案事被下間敷奉願上候。

以上の書翰は殘半片であるが今泉氏著河井繼之助傳には全文あるから今前半片を借りてこれを接續し完璧を期さん

今宵は十三夜、天に極雲、御地も定而同然、寒くも庭前にて御樂可被遊儀も相成候はん、十五夜は五つ頃より四つ過迄殊に明月、先便も申上候通り、七月も八月も今宵も、皆明月、誰樣魚御出も有之候歟、大切の隣家を今迄忘居候。大原中島邊には御出會も候哉、宜敷申上候旨、御會の節御傳奉願上候。然事も無益ながら、お安の家、君りもなき樣子なれば、はんの未だ年も若く候に候、私共事に艱難辛苦いたし候

は可然事ながら、男子とも遠ひ見みせまき故張合を失候へては氣の毒に存奉候、併女子にも、辛苦艱難を遂げ、名を遺し候者も昔より數々之有、假令古人に及ぼずゝ、心の持樣にて人に勝れ候事に可相成、隨分出精可致事に奉存候。只々心を置く持、氣を不屈樣にいたし度事に御座候、辛苦艱難を樂みとするは、聖人もかたんずる處、乍去苦んでするより、一身の考への種にも可相成と樂んでするときは一分の仕合、此等の言葉も誠に云事に候得共

以上の前文に小西先生寄贈の書翰が續くのであるが、今泉氏の傳記中の文字と二ヶ所程相違の點あれども同一書翰の片分れなること充分推量出來る。十三夜の明月に遠く家鄉を思ひ出し、河井氏が最も愛した令妹安子の姑務めの辛苦を察し慰め且歸女子の心得を述べられた親愛の情溢は紙上に躍如としてゐる當今の歸女子達にも好個の清涼劑であると思ふ。（紅秋）

○萬葉の歌風は真率で強剛で雄大で幸誠で素朴で性に富む歌の特と天真流露がある

あの四頃の世は今の所謂るモダンとも云ふべき流行であつたと考へられる、左に二三の例を掲出する。

一 妻背子がけせる衣の針目おちず
入りにしけらしも我が心さへ

二 花ぐはし葦垣越しに一目
相見しゆゑ千重の思ひ慰さつ

三 夢の帰く暗谷にうちはめて
焼けば死ぬらむ君をし待てば

四 生りつつも君をば待てと白たへの
吾が里離れ雲の重なれば

五 かくばかり恋ひつつあらずば高山の
石根しまきて死なましものを

六 丈夫のさ小弓持ち立ち
恋のやつこと成りて死ぬべし

七 今はわは死ぬらむよ我背
恋ひまくは一日だにあけくもあらむ

○昭和三年一月を限りて終らんとす、毎年大阪日々新聞に載せられ、若い頃と異つて、まあ今年も生存を得た

かと自殺の念慮を湧す。実にどんなに寿を保ちたいとつゝ笑ひもすれども生きるといふことを自信もなく。敢て死なゝもなるが、生るものが空事ゝ考へるのは仕合と考へるものゝ為めの自殺の念も起るのである。殊に八十年の脳を有つもゝ浮き自殺の念のあるのは、来年は七十の齢を迎へるからである。今の世の中は七十をゆゝ古稀といふも高ゝるいやうなる、同齢の友人は少かるべきあるまゝ考へるも、七十の齢を保へるの孤ゝくゝ係し自分合の家の多い七十を祝ゝ八十歳命生存し人の当相のゝ皆七十前ゝ祝ゝんみることを考へると自分合の被

横原製

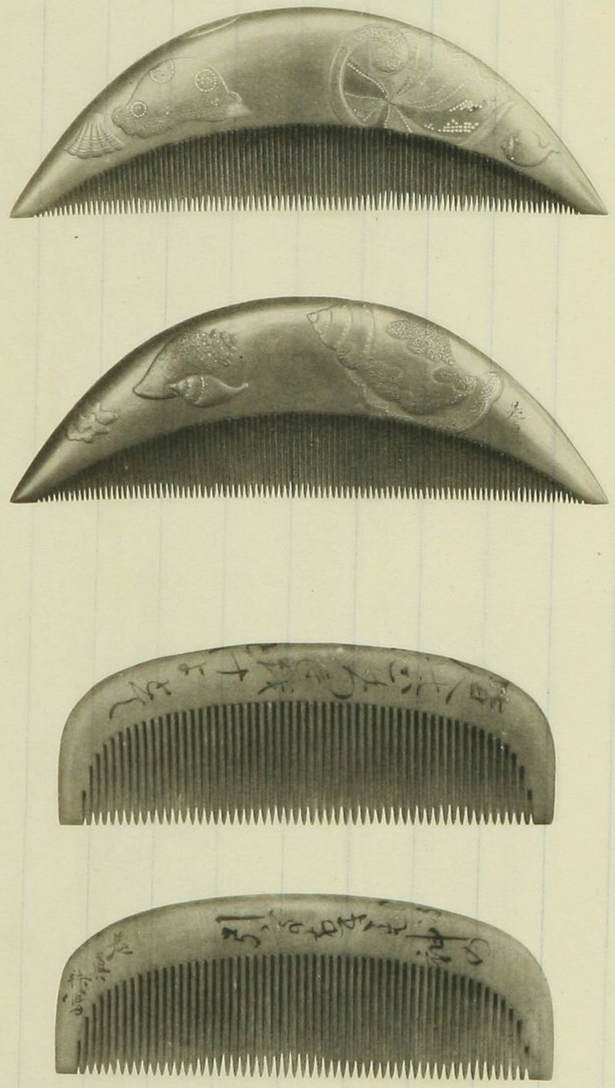
格といふことが出来る。体格がひどく弱い譯ではなく養生も終始怠らず、何のかと云ふ摂生の可ゝ乱暴ではあるが、ゝゝ頑健で精神も視力も聴力も一向衰へず、七十を迎へことが出来るのは命の仕合と云ふ外ないのである。

自分合は幸の天地に生れ、維新の革命も遭遇し四箇を経て、日本の隆興に遇ひ、著書を通じて浴し、日本未曾有の大戦を経験し、世界無比の大戦を見ることが見れるのは、北海の家庭に生れ、真に生甲斐あることゝ云ふべきことゝ云ふことが出来る。且つ文明の利器は人の生活を加へ人の精神を及ぼす便利

を無て、故人が一年も長く生存することを願ひ、一月も長く生存することを願ふと云ふことを、一年も長く生存することを考へると故人なども
武十信も壽を保ちたりと謂ふことが出来る。
で、全く文化の庇蔭に因ることを得ぬ。
今から十年前自分が還暦の祝を迎へた時
祝賀人の自分を祝したくれたが、振り返つて考へる
際と今とどんなに体力健康が異つたかを考
へて見ても、別に異つたことの無い。殊に働
きの一番と云つて、その年一年と信徒するものがあつ
て、心霊の活躍に益々旺盛である。特に言ふべきの
ものは、七八種の著述を公刊したのも皆この
庚申後のことである。此の年一年の日記の末の

標原製

其年の行事の重要なることを摘記すると例へば
ある年は毎年毎に自分の活動の進展
を見ることが出来る。
あるは人間はいつまでも生き得るべきものである。七十を
過ぎて、ようやく身後の計を為さねばならぬ。
自分が主宰してゐる事業のうちでも、高等女学校
もぬきにいふものである。家族に就ても考へねばならぬこ
とがある。書籍・骨董・骨董・図書などの数は、
如何にして取扱ふべきか。大体片づけるも
のは、なるべく自分を留まらしめんとする。別荘・地所・建物を金に
しようけれども、利益になるものは、原資が足らぬ。収
入ある事業に就ての地位も既に自分を去ることを辞する



右柴田是眞作　河竹繁俊氏藏

ことが眼序であらう。幸すると多くの男性からまい。

収入の敢も潤沢でもあるけれども生計を支ふるまい充分でもある。老境と今生計に苦慮することいふまでもなく自分が充実をもたらしてゐるのの賜る仕合でもある。

昭和三年　陰庵

金花見法二

御掛

滿洲國神御影

啓興謹書

これは櫛の箱書と包紙の上はがきなりいつれも河竹氏の母堂の是眞にたのみてこしらへてもらひしものなり河竹氏の好意によりてこゝに掲ぐ

昭和四年一月以降之記

新年無病にして浴し終れば業を任し
と雖ども書き出すべき事
湯気を教業とし二つ三つあり

一いくら朝早くても直ぐに人定まる後
でも心任かせて浴し湯ることハ温泉
場の特色もいとまもなく
一春生の使ひ市中横町を巡ハ直
中の教業
一山に河に道に湯気漲るが如き氣
分
一暢んびりした快闊氣分となるも此場の

の一徳
一浴場に居ながら人と離れ一無裸
体で人間を教ハ此場不可ハ
一人の事ハ丸裸ましと見る此の場不
可る事
一知る人と語り訪れ互ひに酒食
を饗するも無きにあらず
一隣室の客と語を交へ動揺ひいつ
しか親しんとなることもあり人氣
雑多快闊氣分の立ち業さう
一無聊と寂しき四金生活を見ず

人義術を見るも北場本手のばこを
一風俗祝祭之名を称して慶賀を祭ふこ
とも一興なり。しかしこれハ若い時のうつ也
一湯殿なり。浴場も陸ふ場ろくもいろ特徴て、
○夫婦い家庭とハ一小天地を心えもまり生
すうの供心もあんハ默心也あり、
○真海の市中を散策しいつも北地とあ
うを勿体ろ〳〵思ふ、ろ中林梅林の吉いと
菓子屋の看板
○童心ヒ成切し郭を成心で陸芝居するあ
陶器ハ仕て小伊賀浸味ちとけあるもの
多くの義ニ術成心が宮をなすうの力かうす

○紫色の蓮容易の花とのあ也ず、如ぬも
なる北地真海世界性で寒気を感ふ之
ハてゝ花を為ちゝ寒中特お
の保護を要す
○場内道是昨年十六稱の年に達し、気を紀
会を為める同人ハ幾紀しも浴剣術教授と是大
の稱(内)と建て書道是自身赤真海の別荘
る何から書書を建て花壇を置く所と云つ、
北の二口の書真の北と書の道の二風こ成り、平凡を
脱するうの道是松昔の趣味を愛こ云す
を得ぬハ欲美こ位す、
久爾道安屋下書賜真海の浴場道是

の古墳をなしたりとのお思召なれども物と台臨あらせ
遊ばされ西して古墳の西部と御境を伺ひしに
りとのみ、北方の古墳の墓とするを得べし
北の異形の遺築は東西の異形なるこの之
めを見て納骨堂と著す、古墳は殿を笑て曰
く、聖賢の言を花する者の少りとする北堂
ハ花現の堂とこれを得べし　納骨堂と見
るも敢て不可なるべし、余古墳と北の墓下
の古墳と花庭中北のこと少き、余の曰感の
説と為して曰く、古墳の鶴の墓の如きもの
也、墓面の墓の形勝を花するもの、古の教を
特神の墓とうと耶か古墳の説を補

あるべきも一笑す、
余既に北墓を因本山花洗寺と呼ぶ、古墳
也建築の為す所一萬四大正文藝と
古墳の著作を如めとす印稿の金部いこと
投きるに好也北の北花為す所以也
墓の入口に二個の羊の彫像あり墓し古墳の
名小羊と形ひるこの、羊と羅田語と漢字
の標語あり共に同者に関するこの也
一に曰く nutrimentum spiritus (food of spirit)
西養性室以培其基

他の一に曰く

Non multos sed longa (not magna) Grat Sord

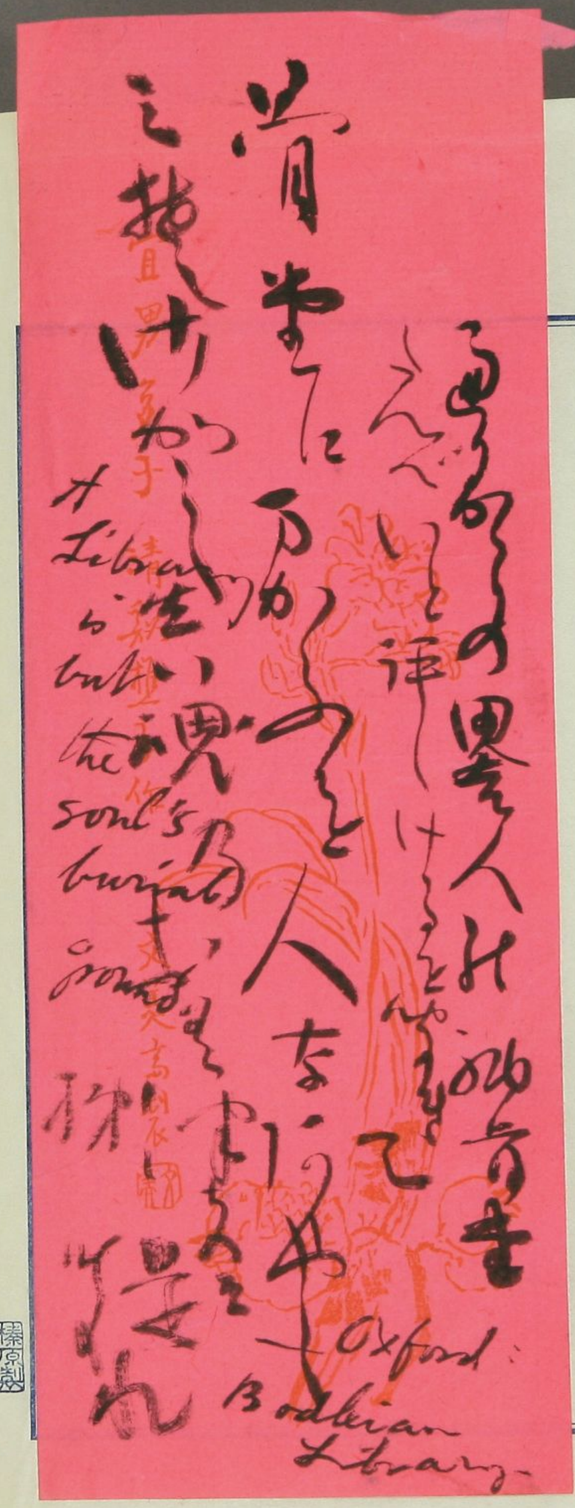
近退今古表裏人花

それは第二の羅甸語を愛する北の遠楽に就
たる伴細金の日誌と紹しある、再びこれを
説せり

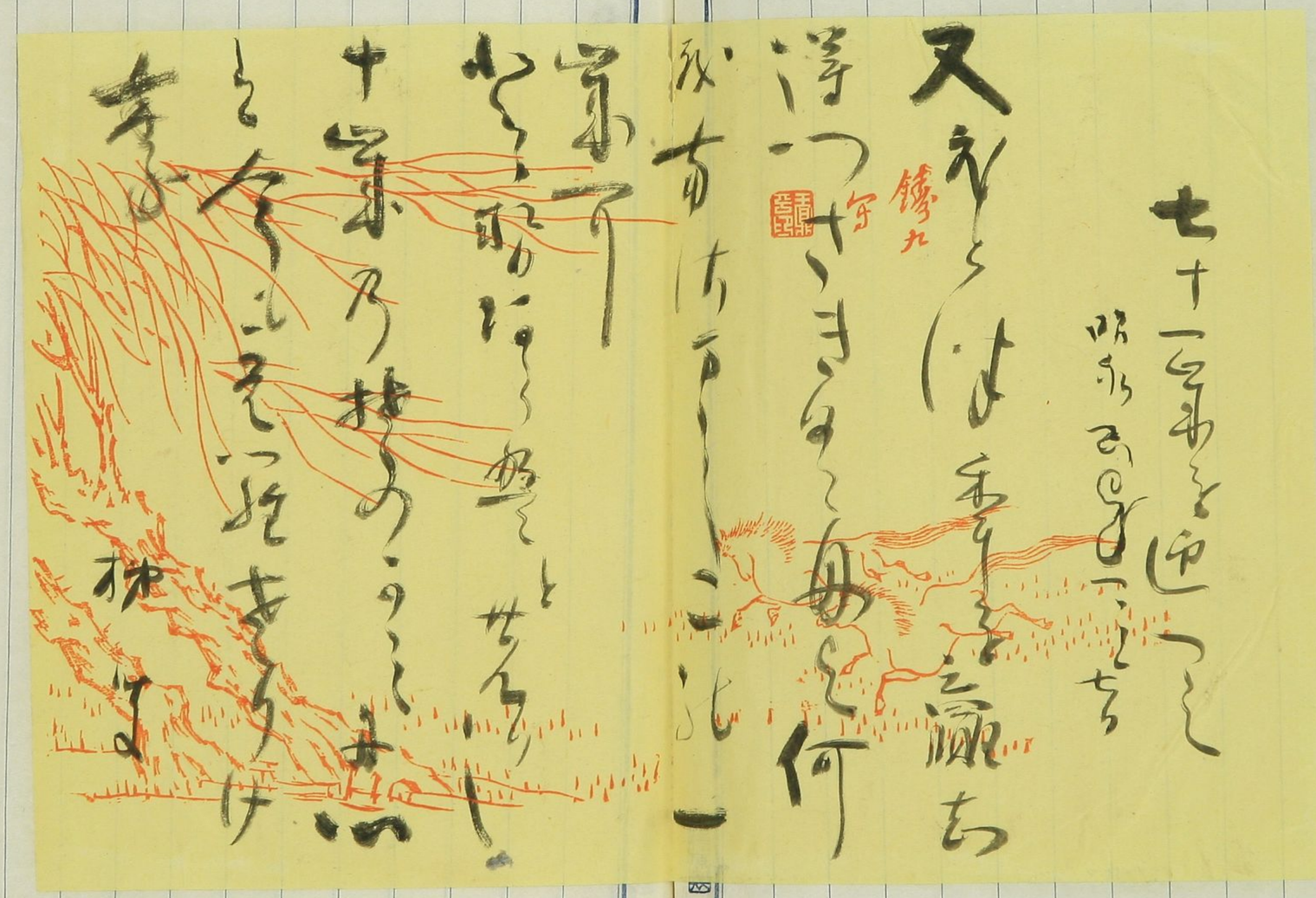
書巻の二方に枯枝多く植えあり、夜中陸地より
口国の雷鳴燈火横針の新に書巻の白
堊に映ず、一夜の親也、えん無しも得がたき
向とうめをゆく

書巻の位地の高地を取り持る低くきを
選んと達つ、道路遠くもそれ以上
をえる、樹多き時は、地々樹多隠れ
まるるもうるし、北の奥床かしさに道路用
意のある所、伏流すべ高地に達て大い
る術なるべん
北の書巻の風致は陸地の如く国らしな賞
し得べし、もがが為め、ひくまるる和歌
の花鳥に係ることの誤解し易き向て
伏兵のごとくが出来お困りでもとうもし
云へばるこのあるも且つ此の矢の
左の二首は書巻遠が好と金る云しるる

さこの
なかに
Libraries are the shrines where the relics of saints are preserved
陸奥
文麦
錄巻寫言
書
庫
の
わ
Proposed by Beaton
一朝
仏
Books are sepulchres of thought
Longfellow


人は死
人なり
Oxford: Bodleian Library
A Library is but the soul's burial ground
林屋

茶こ収め和



抜抜と見一ヨ、

博多の模範商人

贈從五位松永宗助翁の事蹟

我が博多が海外交通の要津として、貿易互市の雄市として著はれたるは千數百年前の往昔に屬し、由來甚だ遠ふして且つ久し、たゞ上古の事は文獻乏ぼ

ることゝ仁にして佳譽あり。十五六歳の時より、藩の儒眉藤峨眉先生を師として經史を修め、また横岳崇福寺の曇榮和尚に就て書及び詩を學び、早く俊才の目あり、望を將來に屬せらる。享和三年歳二十一、父蕉雪齋を喪ふて家を承け、是より身を商務に委ねて家政を經營し、善く祖先以來の遺緒を守りて家に勤め事を執り、また慈善德行を旨として常に貧窮を救ひ孤獨を憐み、親族故舊を視ること愈々厚くして情あり、黒田家嘉賞して數ば之を旌表せり。宗助恭謙遜讓して益々愼み、苟も敢て自ら居らず。此間依然として學を講じ文を修め、好みて天下の名流士太夫と交りて敬重せられ、藝苑の巨匠大家博多を過るや、來りて訪はざるはなく、名聲遠く上國に播せり。種山陽梁川星巖賈名藤陰等の

福岡市藏本町
叙正六位　太田清藏
褒賞
福岡市東中洲町
緑綬褒賞下賜　松居元右衛門

侯伯と抗禮して交りたる商豪を以て、島井、神屋の二人は曩に朝廷より遺功を錄せられ贈位の光榮を賜ふ。之れを後にして松永宗助あり、今こゝに御即位の大禮を行はせられたる佳辰に於て、生前の善行を賞せられ、特に從五位を贈らる此三人は蓋し商人の

千六百六圓減産を示せり。

卸賣物價及商況

十月中に於ける卸賣物價は主要品六三種、平均指數は八〇・四五にして、前月に比し二・一四、前年同期に比し〇・六一下落を示せり。

樣原製

博多の模範商人

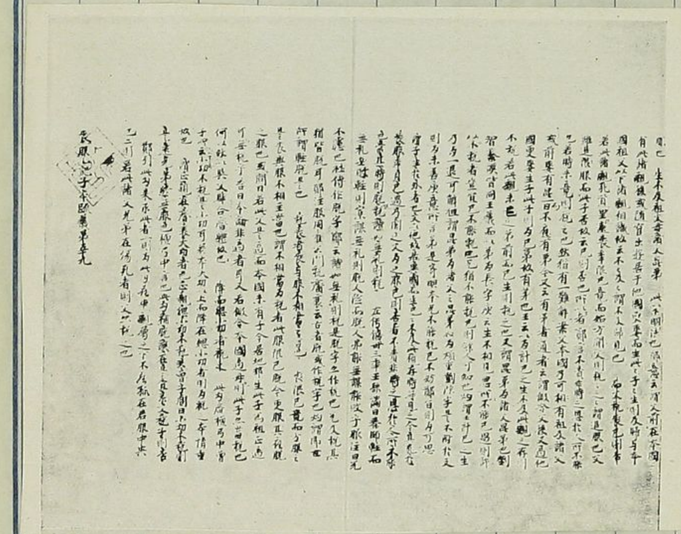
贈從五位松永宗助翁の事蹟

ここと仁にして佳譽あり。十五六歳の
儒眞藤峨眉先生を師として經史を修
崇福寺の曇榮和尚に就て書及び詩を
の目あり、望を將來に屬せらる。

博多の模範商人

贈從五位松永宗助翁の事蹟

我が博多が海外交通の要津として、貿易互市の雄市として著はれたるは千數百年前の往昔に屬し、由來甚だ遠ふして且つ久し、たゞ上古の事は文獻乏ぼ



しく貌として詳細を考ふべからざるも、近古兵火の難に罹りて燒亡し、ふたゝび復興したる後また已に三百年の星霜を閱し、終始西日本の名邑として今日に及べり。此間市民の裡より起り、手腕を揮ひ事業を經營して地方に知られたる者あるも聲譽を天下に顯はしたるは必ずしも多からず、之を前にしては、島井宗室、神屋宗湛、大賀宗伯の三傑あり夙に織田信長、豐臣秀吉、德川家康等に識られ、また海内の侯伯と抗禮して交りたる商豪を以て、島井、神屋の二人は曩に朝廷より遺功を錄せられ贈位の光榮を賜ふ。之れを後にして松永宗助あり、今こゝに御即位の大禮を行はせられたる佳辰に於て、生前の善行を賞せられ、特に從五位を贈らる此三人は蓋し商人の模範にして埒々また博多の名譽を發揚するものゝ云ふべし。

松永宗助は博多の由緒正しき舊家に生れ、世々勤儉力行を家風とし業に勉め富を成し、七代を經て宗助に及べり。高祖父德兵衛雅當、祖父瀨助一英、相次て博多の年行司となり、名望あり。父蕉雪齋一俊通稱德右衛門、溫厚篤實の人物にして文墨の嗜好あり、市民の深く信賴する所となり、藩主黑田家の眷顧また甚だ厚く、政廳新に御用心米の制を設け、米穀を貯藏するや、特に擇まれて市民の最も榮譽とする御用心米頭頭取の職を奉じ、且つ黑田家より博多第一の閥閱大賀氏の次席に座する禮遇を與へられ、忠實恪勤以て身を終ふ。

宗助は蕉雪齋の長男なり、年少にして人となり醇厚謹直を稱せられ、父母に事へて孝、親族故舊を視ること仁にして佳譽あり。十五六歲の時より、藩の老儒眞藤峨眉先生を師として經史を修め、また横岳山崇福寺の曇榮和尚に就て書及び詩を學び、早く俊秀の目あり、望を將來に屬せらる。享和三年歲二十二、父蕉雪齋を喪ふて家を承け、是より身を商務に委ねて家政を經營し、善く祖先以來の遺緒を守りて業に勤め事を執り、また慈善德行を旨として常に貧窮を救ひ孤獨を憐み、親族故舊を視ること愈々厚くして情あり、黑田家嘉賞して數ば之を旌表せり。宗助恭謙遜讓して益々愼み、苟も敢て自ら居らず。此間依然として學を講じ文を修め、好みて天下の名流士太夫と交りて敬重せられ、藝苑の巨匠大家博多を過るや、來りて訪はざるはなく、名聲遠く上國に播せり。賴山陽梁川星巖貫名海屋廣瀨淡窓の如きは、最も深交あり。而して此等の人々は、宗助の藝術文墨の才よりも、平生の人物德行を稱するを常とし、尊敬推服の情は歷々として詩文簡牘の間に著はる。

貫名海屋は昔て政廳の宗助を優賞したる文書に題して、博多の松永子登性學を好み、夙に孝德を以て稱せられ、閭門雍熙の美を極め、餘愛施ひて閭門に及び、數ば官の優賞を蒙ると稱し、廣瀨淡窓は詩集に序し、子登の先筑前に居る數百年、號して名家と爲す。子登善を樂み學を好み、喜んで賢士太夫と遊ぶ。其信義鄕里に著はれ、其名譽上國に播す、人の其詩を重んずるは詩よりも重き者ありて存するを以てなりと云へり、筑前の老儒月形鵠窠また同く詩集の序に於て、松永子登は博多の邑豪なり、少うして孝を以て聞へ、長ずるに及び、溫柔敦厚善く人と交り、日に貧を賑はし急を周ふを以て事となし、邑人依賴す。藩廷屢ば旌賞を加へ廩俸を賜ふ。其榮たる三世に延ぶと云ふと稱し、また別に子登世々貿易を業とし儉業を崇ぶと云ふ。龜井昭陽また嘗て子登幼より横岳に往來し、詩及び字を我叔禪月に學ぶ、我れ屢ば聞見して之に感ず、先考亦た子登を愛す、嘗て其招に應じて留歡し、歸りて余に語るに、其執事の愨と守夜の謹とを以てし、之を稱して口に容れずと云へり。

諸老先生の之を推稱すること斯の如きものあり、亦以て宗助の平生の一班を考ふるに足る。此間に於て、特に忘るべからざるは、文豪賴山陽の西遊を迎へ、禮と情とを盡して待遇し、藝苑に佳話を留めたる事とす。

賴山陽の九州を漫遊するや、日本外史も山陽詩鈔も、他の幾多の著述も、未だ世に行はれず、その名聲は彼の大なる文學の天下を風動したる後年とは同日に談じ難く、當時に於ては、唯纔に詩文に巧なる一才人、若しくは德望ありたる春水先生の遺子として知られたるに過ぎず、年少の時素行動もすれば修らず、數ば父母の憂を爲したる惡聲は、その漫遊に先んじて赤馬關の海峽を越ゆること已に久く、且つ山陽自ら居り自ら見ること頗る高く、常に談論風生し敢へて鋒鋩を露はすを避けざりしを以て、到る處行く處、九州人の厭苦する所となり、甚だ冷薄の待遇を蒙り、その漫遊の光景は、落寞凄涼を極め、筑前に於ても同じく斯の如くなりき。然るに宗助は從來何の情誼もなき間柄なりしに拘はらず、山陽の門

稅制整理に關する件（神戸商工會議所提出）

三件は一括して議題に供し審議の結果本會議所名を以て政府に建議することゝし其の文案は政理事に一任せり尚本件は來る十一月開催の定期會に提出することゝしたり

金融整理に關する件（東京商工會議所提出）

件は發送理事より詳細なる說明あり之を後會に

しく藐こして詳細を考ふべからざるも、近古兵火の難に罹りて燒亡し、ふたゝび復興したる後また已に三百年の星霜を閱し、終始西日本の名邑こして今日に及べり。此間市民の裡より起り、手腕を揮ひ事業を經營して地方に知られたる者あるも聲譽を天下に顯はしたるは必ずしも多からず、之を前にしては、島井宗室、神屋宗湛、大賀宗伯の三傑あり夙に織田信長、豐臣秀吉、德川家康等に識られ、また海內の侯伯こ抗禮して交りたる商豪を以て、島井、神屋の二人は曩に朝廷より遺功を錄せられ贈位の光榮を賜ふ。之れを後にして松永宗助あり、今こゝに御即位の大禮を行はせられたる佳辰に於て、生前の善行を賞せられ、特に從五位を贈らる此三人は蓋し商人の模範にして抑々また博多の名譽を發揚するものこ云ふべし。

松永宗助は博多の由緒正しき舊家に生れ、世々勤儉力行を家風こし業に勉め富を成し、七代を經て宗助に及べり。高祖父德兵衛雅當、祖父瀨助一英、相次て博多の年行司こなり、名望あり。父蕉雪齋一俊通稱德右衛門、溫厚篤實の人物にして文墨の嗜好あり、市民の深く信賴する所こなり、藩主黑田家の眷顧また甚だ厚く、政廳新に御用心米の制を設け、米穀を貯藏するや、特に擇まれて市民の最も榮譽こする御用心米頂頭取の職を奉じ、且つ黑田家より博多第一の閥閱大賀氏の次席に座する禮遇を與へられ、忠實恪勤以て身を終ふ。

宗助は蕉雪齋の長男なり、年少にして人こ爲り醇厚謹直を稱せられ、父母に事へて孝、親族故舊を視ること仁にして佳譽あり。十五六歲の時より、藩の老儒眞藤峨眉先生を師こして經史を修め、また横岳山崇福寺の曇榮和尙に就て書及び詩を學び、早く俊秀の目あり、望を將來に屬せらる。享和三年歲二十二、父蕉雪齋を喪ふて家を承け、是より身を商務に委ねて家政を經營し、善く祖先以來の遺緒を守りて業に勤め事を執り、また慈善德行を旨こして常に貧窮を救ひ孤獨を憐み、親族故舊を視ること愈々厚くして情あり、黑田家嘉賞して數ば之を旌表せり。宗助恭謙遜讓して益々愼み、苟も敢て自ら居らず。此間依然こして學を講じ文を修め、好みて天下の名流士太夫こ交りて敬重せられ、藝苑の巨匠大家博多を過るや、來りて訪はざるはなく、名聲遠く上國に播せり。賴山陽梁川星巖貫名海屋廣瀨淡窓の如きは、最も深交あり。而して此等の人々は、宗助の藝術文墨の才よりも、平生の人物德行を稱するを常こし、尊敬推服の情は歷々こして詩文簡牘の間に著はる。

貫名海屋は嘗て政廳の宗助を褒賞したる文書に題して、博多の松永子登性學を好み、夙に孝德を以て稱せられ、閨門雍熙の美を極め、餘愛施ひて閭門に及び、數ば官の褒賞を蒙るこ稱し、廣瀨淡窓は詩集に序し、子登の先筑前に居る數百年、號して名家こ爲す。子登善を樂み學を好み、喜んで賢士太夫こ遊ぶ。其言義鄕里に著はれ、其名譽上國に播す、人の其詩を重んずるは詩よりも重き者ありて存するを以てなりこ云へり、筑前の老儒月形鵬窠また同く詩集の序に於て、松永子登は博多の邑豪なり、少うして孝を以て聞へ、長ずるに及び、溫柔敦厚善く人こ交り、日に貧を賑はし急を依賴す。藩廷屢ば旌賞を三世に延ぶこ云ふこ稱し業こし儉業を崇ぶこ云ふより橫岳に往來し、詩を學び屢ば聞見して之に感れて其招に應じて留歡し、數ば父母の憂を爲の慤こを守夜の謹こを以こ云へり。

諸老先生の之を推稱亦以て宗助の平生の一斑て、特に忘るべからざるへ、禮こ情こを盡して待る事こです。

賴山陽の九州を漫遊するも、他の幾多の著述も、聲は彼の大なる文學の天日に談じ難く、當時に松一才人、若しくは德望あて知られたるに過ぎず、らず、數ば父母の憂を爲先んじて赤馬關の海峽を山陽自ら居り自ら見ること敢へて鋒鋩を露はすを行く處、九州人の厭苦す遇を蒙り、その漫遊の光前に於ても同じく斯の如來何の情誼もなき間柄な

人後藤松蔭を携へて來るや、自ら出でゝ箱崎に迎へ、師弟二人を己の家に留め、歡待すること數十日、その去るに當りては、また自ら往いて之を太宰府に送り別れたり。當時藩學修猷館の諸生山陽の人物を貶斥し、その久く藩内に留るを喜はず、やがて議論紛々として起り、教職の一人井土學圃を擁して、學政を管する藩老矢野幽石に迫り、將に政廳をして逐客の令を發せしめむとす。學圃密に狀を宗助に告げ、山陽をして急に去らしめ纔に事なきを得たり。然れども、世々職を藩學に奉ずる竹田梧亭竹田榛齋の叔姪は、妄に山陽と交り來往したるの故を以て政廳の譴責を蒙りたりと云ふ。當時の事情また想ふべし。宗助乃ち獨り善く此間に處し、一方に於ては、山陽を待つに禮と情とを失はず、一方に於ては、藩人の誹謗を受くることなくして止みたるもの、蓋し平生の人物の自ら致す所なり。龜井昭陽は嘗て宗助の山陽を待つの道を得たるを美とし、說を爲して、賴子成の西遊、人は其卓弛にして道學を講ぜざるを以て灼顯之を視る、而して子登は諸を其家に留むる累旬、其來るや迎へ、其往くや送る、子成人口紛紜と雖當世の奇才子なり。其をして筑に人なしと謂ひ、長嘯して以て去らしめざるは子登なり。我れ今に至りて之を德とす。是れ子登唯休々として容るゝことあるのみならず、亦た卓然として達識ある者なり、然れども其素雅人に孚なるにあらざれば、殆ど淸議を免れずと云へり。亦以て此間の消息を考ふるに足らむ歟。

宗助の如何なる程度に於て、山陽の本領を了解し山陽の眞價を認識したるかは固より俄に判斷し易からずと爲すも、その他人の甚だ之を重んずることなく動もすれば侮蔑の情を爲し多くは冷眼を以て其漫遊を送迎したる當時、宗助乃ち獨り善く禮と情とを盡して欵待し、或は節女阿政傳の好題目を託し、山陽遺稿に有數の一文章を添へ阿政をして能く千歲不朽の人たらしめ、或は博多帶の土宜を贈りて七古の佳篇を作らしめ、また或は別時一言の諾を重んじ、周旋盡力終に盛茂脩の畵幅を得て山陽に致し、此文豪をして彼の大鹽平八郎の贈りたる名高き蘆鷹圖と並び愛して之を珍藏せしむ。斯くの如きは、當時山陽と交遊したる他の九州人には絕へて無くして、宗助に於て纔に是れ有りたる所なり。顧ふに山陽西遊を終はりて京都に歸りたる後、文壇に雄踞して一世を壓倒するもの凡そ十五年。身已に死して人愈々重く、幾多の著述相次いで世に出るに及び、大名盛譽隆々として天下を風動し、文壇の氣運爲に一變す。此時に方り、山陽の窮愁困頓して去來したる九州の某郡某村の間、文政元年の昔、曾て相見たる蒼顏悴容の漫遊者を追想し、額汗の滴たり落つるを覺へたるもの豈に尠しとせむや。廣瀨淡窓の如き名家すらも、後年河野鐵兜の詩卷に題して山陽と梁川星巖の事に及び、今は賴梁の名天下を風動し、人は其面を見其言を聞くを得るを以て榮となす。予は方に當時相待つの疎なりしを悔ゆと云ふ。その深く悔ゆることなかりし第一人は蓋し宗助歟、此人の此人たる所以は固より別に多く存す。たゞ善く禮と情とを盡して山陽を待遇したる一事より之を云ふも、自ら是れ凡常の人にあらざるなり。

宗助居常公益を重んじ民利を念ふの志甚だ篤く數十年の久しきに涉り、嘗て一日も弛廢せず、藩内の士庶財用に窮して疲弊を極め、政廳救助の目的を以て新令を行ふに方り、宗助は藩政の趣旨を體し、自ら請ふて或は藩中の士人の己に對する債務の辨償を年賦據置とし、或は郡衙に貸附けたる債權の殘餘を長期年賦とし、或は農民に對する債權の全部若くは一部を拋棄し、或は町家に對する債權の年賦償還の期限を倍加し、以て藩士の窮乏に裨補し、農商の困難を救助し、また幾十石の米穀を義捐して窮民賑恤の用に充てたること、その幾ばくなるを知らず。藩庫缺乏を告げ御用心米貯藏の制廢せらるゝに及び自ら五六の同志と相謀り、率先して四百三十俵の米を納れ備荒貯蓄の道を立て後の博多財產區有財產の基を開き、或は橋梁架設の費を献して公共の便益を謀り、また賴る所なき棄子を收容して扶養するもの二十二人、父蕉雪齋の時、及び嗣子德兵衛の時に收容する所を合はせ、前後幾んど四十人に及ぼむとせり而して宗助は平生陰施を好みて名聞を避け、多くは家人と雖、與り知らざりしを以て、その扶養を蒙りたる實數は、明かに一々算すべからず。その世を去るや無名の香火墓前に滿ちたりと云ふ。蓋し嘗て庇護の恩を荷へる人々の薦むる所なり、亦た以て生前の慈善德行多かりしを證するに足る。

藩主黑田家は宗助二十二歲の時、その善行を賞褒したるを始とし爾來數ば旌表し、累次名譽俸を加へて終に七人扶持を給し、且つ大賀氏の家格を與へて

之を禮遇せり。七人扶持の俸米は、當時の慣例町家に給せらるゝ最高額なりしが如く、大賀氏の家格もまた蓋し最上の禮遇なりき。藩政の初大賀氏は町家ながらも格別の功勞ありたるを以て、特に五十人扶持を給し、異數の禮遇を與へ、市民の首位に班せしむ。七人扶持の俸米と大賀氏の家格とは、即ち大賀氏の次に座する資格にして當時の博多人としては極限の禮遇を受けたるものなり。黑田家の宗助を賞褒したる事實は、公文書の猶ほ存するもの十餘通あり皆以て徵とすべし

宗助名は一豐、また修して豐とす。字は子登、花遁散人は號なり。始は龍門と號す、通稱宗助次て德右衛門また德兵衛と稱し、家を讓るに及び、ふたゝび宗助に復す。天明二年を以て生れ、嘉永元年を以て歿す、享年六十七、蓮池町の善導寺先塋の次に葬る廣瀨淡窓爲に碑文を作る、錄して墓背にあり、簡明にして善く言行を寫せり。銘に曰く、

清唳高揚、自彼春水、同聲相和、豈有遠近、
發孚庭闈、著信閭里、有質有文、嗚呼君子、

また以て宗助の人品を想ふべし。

宗助歿して數十年、維新後の世變を閱し人性風俗著しく移る所あり、子孫また不幸にして產を失ひ家衰へたるを以て、生前の人物事蹟漸く泯沒し、博多の市民と雖、之を知る者甚だ稀なるを致せり。博多の故老遠藤甚藏翁實に宗助の次男宗右衛門一乘の生む所にして宗助の孫に當る人と爲り溫厚篤實にして、先世を念ふの情甚だ篤く、祖父の遺德全く亡びむとするを悲み、明治四十年の春、博多商業會議所の書記長大熊淺次郎氏に謀る所あり大熊氏は嘗て故江島茂逸翁と力を戮はせ、博多三傑傳を作り、島井宗室神屋宗湛大賀宗伯の事蹟を顯彰し始めて世間に紹介したる人なり。また宗助の人物性行を知りたれば深く遠藤翁の志を諒とし、春山育次郎氏に囑して先づ小傳を作らしむ。春山氏故記錄を探り父老を叩いて資料を蒐集し、松永花遁の一篇を成して之に答ふ。遠藤翁乃ち印刷して緣故ある親族知音に頒つ。蓋し宗助の事蹟漸く世間に知らるゝの始なりき。爾來二十年筑前地方の先哲前人の研究、漸を追ふて行はれ中には贈位旌表の榮典を蒙りたるものありたれども猶ほ宗助に及ばず、今こゝに昭和三年の秋聖天子御即位の大禮を行はせらるゝに當り故人の嘉蹟善行を調査せられ追賞の恩命を賜ふの趣旨を以て豫め內旨を地方の政廳に下されたるを知り遠藤大熊の二氏は宗助の事蹟に就て思ふ所あり相謀りて當該の衙門に文書を提供し、宗助の事蹟を具狀せられむことを、稟請し、當該の衙門また之を嘉みし採りて上班の官廳に進達せられ御詮議の榮を蒙る、己にして御卽位大禮の儀を行はせられ、此日を以て宗助に從五位を贈らせらるゝ恩命の發表あり、聖恩枯骨に及ぶ遠藤翁大熊氏等の感激欣悅推して知るべきなり。我博多商工會議所は、事管內に屬し、光榮を分つの理由あるを以て、今茲に被贈位者の事蹟の梗概を叙し、市民一般に告ぐ。顧ふに博多は古來の名邑にして市廣く人多し、各々自ら善く意を用ひ力を致して、事蹟の闡明に努むる所あらば此他また幾多の被贈位の詮考を蒙るべき先哲前賢なしと云はむや。

松永宗助翁畫像

實業功勞者叙位及表彰

今回御大禮御擧行の佳辰に際し多年我國實業界に盡瘁せられたるの功績に依り當地に於ける左記各氏に對し叙位及表彰の恩命ありたり

叙　位

○結婚の目出度事は大切なる事であり、男女の結托であり、家と家との提携であり、老若男女誰れも望むであらう。そこで後顧でおもしろいことであるが、さて女の枝葉の事で祝詞を頼まれてもおもしろい事が思ひつかぬ。人のやるのを見て聴いてもまくの平凡である。実に頼む程くるしく、女の真を破り、飾り妖媚と陰を礼こそ嘸かし立派な理屈が八百万あるやうなこと云ひ面白いことである。いつそやも婚礼の祝者が来て、婚礼席上の演説はいやるが何かおもしろい清流の清流の清流はないかと尋ねられたことがあり、凡の変つた結婚式

福岡市藏本町　太田清藏

叙正六位

褒賞

福岡市東中洲町　松居元右衛門

緑綬褒賞下賜

千六百六圓減産を示せり。

卸賣物價及商況

十月中に於ける卸賣物價は主要品六三種、平均指數は八〇・四五にして、前月に比し二・一四、前年同期に比し〇・六一下落を示せり。

材の二六・四七、杉四分板の二・八八、杉丸太の二六・九三、菜種油粕の五・七五、麩の一・二七、石炭の一・〇五騰貴の一四種

保合のもの

醤油、麥味噌、茶、牛肉、豚肉、鶏、鶏卵、牛乳大麻、羽二重、晒木綿、白モスリン、石灰、セメ

苦竹、過燐酸石

燐寸、疊表、牛

一時好況を呈し

且厄日たる二百

害虫の被害も少

収穫高は平年作を

況なり。

手持筋の賣腰強

て安値を呈せり

れ殊に北咸地方

簿なるに滿洲産

地手持筋の嫌氣

合なるも氣配軟

大根發育時に降

に比し二割五分

賣出したるが漸

○法婚の目出度事は大切なる事なり男女の法托なり家と家との提携なり老多なるあんかなり吹もあり、ちゃうく複雑でおもしろいことでもあるかさて其の枝葉の摩て祝詞をと頼まれてもおもろしい事が思ひつかぬ人のやるのを見て聴いてもうまくいく平凡なる口の真を彼く飾り恢諧と陸を礼こちゃ(ハ)ぬ軟かい主旨なる理窟かつ花のつもるなること云ふ事あと難いことも有る。いつそやも婚礼の祝者か来て、婚礼席上の演説は何か困るとおつさんやるから何かおもろしい演説の御注意はないかと乗ぬ為れ此ことも有り昨日の変つた結婚なる

や自分の稚拙の後悔のある拙作をどんな自己批判も
ある譬喩が新文明の教訓するやうなことをある
と信ぜず平凡に陥るか例ひある。須田去江春松の近
著を読み「拙婚生活」の一章の中に、婚る者の
を得た所がある。拙婚者の祝福ひたいものが
好材料とする。
……現在の日本に於ては、初め個人が個人の世界
を持ち得る時代に向ひ来つたのである
。これを根本として、拙婚問題の生活がは
じまる。二つの別かる自覚ある個人の合成な
生活が初まるのである。
この基本に立つて生活ひある限り努力し

たるの合成の完成を期せねばならぬ。
この生活は決して自分等が作つたものでなく
故に自分等が破つてよいとは言へない。一つの
芸術品が、その創作者の手を離れた時に
客観的な存在となるのと同じくその合成
の生活は互の努力する所に新たに
行くものである故に今日の生活が傑心ひるの
つたのである。日々の生活を傑作とするがよい
生命と真摯なる芸術的努力が安せらるべき。生
活の一部たる芸術的である。いかなる素材を
取り換へても、その人らしい作品が出来
ハしまる。

愛のある結婚生活とそこに絶えず愛が育つ、あるその間に第二の意味の藝術が更に出来る。
即ち両者の合作の仕事が育つて行く。この愛の結
互間の具体的表現は信頼である。信頼は思
想と実践とを生ずる。生こる心の伸長がある。
その伸長は第三の仕事を具体化せられて行
く。信頼のない結婚、疑惑が生ず、疑惑は善
悪をくらんでゐる如く、愛の表象ひとつ、
寧ろ愛の缺如の表象ひとつ、単なる所有
の表象、支配慾の表象である。信頼が一切
を救ふ。真心を人の胸中に置け、生の信頼の
前に人は決して敗北し得ないであらう。

即ち愛の表象の暖昧ひいては、信頼ひとある。
信頼は自信ひとある。同時に他信ひとある。
人を信じ得ない人は不幸である、信頼なき家庭
は不幸である。
実に家庭、夫婦、合成する藝術品と云ふことが出来る。
夫婦が合成する事業は夫婦の心の共鳴と藝
術品ひとある。その結果、多くの協力
繋つて夫婦の合同の結晶のよう。愛が夫婦の
間に有る大切ひとある所以は愛は合同のクサビ
であるからだ。

昭和四年一月九日記

○此度年初の農民大騒擾に軍隊を出して鎮
座するなどの大騒ぎのようであつたが巨魁若
くは首謀者をあまり容易に逮捕し得ぬの手
際であつたと云へるが大混雑の際とよく云ひ
得かついたと不思議と思ふも此度騒擾の
騒擾前代未聞と言ふべき程の騒ぎ
芝居を演ずるが如きもしもしルムい
を其儘に捕縛し得るの如き逮捕
もなつたとい新聞紙にかも

B 197. Women at a well greeting Rama.
Kangra School. 18th century.
British Museum.
Printed by Waterlow & Sons Limited, London.

西洋から到着した賀状の一二を掲ぐ

○浅草の中見世に助六と名乗る玩具屋があり、中
又世の変を列ねる種々の変屋の仕振おもしろ
き事も日を経るに従ひ一も無けれども此の頃
屋の多い新鮮の一路なれども、其の店頭に陳列する
るもの〻趣味あり、其の特色とするハ、各地の
玩具中のものを仕入れ、変るのみならず、所東京
の物産なるを変るが如く各地の玩具も
絵模様を集めるに便利
絵模して変るが如く
也、全体玩具業作業家が研究用の新奇なる
各地の産物なり、殊に今日に変化を既せる古
き時代の玩具にあんどん変ハ原産を取
らず巧みの絵模するを以て其の特色とす、

二人の作品といふものあり、其作殊に面白し、北
の二人を中心とする玩具趣味家と称せられる
する会員あるよりして会員あ三田小玩具数
巡を経入るなるを嬉び得ること多く、原産の大
きさ五六寸も無る程のものを僅に七八分位の縮
模し、中に人物のも複雑のものあるを能常の手数をか
けて出つ此の如き小品を趣味とすること多く、寧
ろ此の絵模が真に如しみるの作品の低い何れも精巧
であるが、其値も亦不廉なり木彫で彩色を施
九三四寸程のものとなるも十円位もする、玩具業
も決して廉価の道楽でもあるまい、別紙の目録に徴し
玩具の産業番号がある。

道中土産品目

一 秋田 ねこ	七 肥後熊本 木の葉 さる	十二 豐川 狐	十七 信州 蘇民 二十 奥州柳川 きじ車
二 宇治 茶の木人形		十三 博多 狸	十八 江戸 木挽 十九 仝 知恵ノ數 廿一 江戸 飴細工
三 九州 木兎笛	八 男山 鳩	十四 九州 馬 猿	廿二 大阪 饅頭食
四 京都 福良雀	九 琉球 雛		廿三 伊勢 おぼこ人形
五 大津 猩々	十 仝 博多 鳩	十五 琉球 人形	廿四 加州 福徳雀 廿五 堤 花傘人形
六 武州 熊ヶ谷 天神	十一 堤 人形 角力	十六 堤 鯉抱	廿六 伏見 布袋
			廿七 美濃 美恵寺鈴 廿八 大阪 角兵衛 廿九 堤 女郎 三十 京都 姉様

其の品名を挙ることゝなるなり。自分の筆上まハ此
四月の半数位しかまだない。
○地方の習俗を集めた習俗地図(高橋亀三郎)
を淡人が見るまで業に旅するまで関し左の記がある
豊前の国土佐市家に三百五十枚抱へられた
茶坊主土佐市家ハ宗旦から茶店の秘伝を
うけ別と土佐市海をいれ此ハ北海
儀ハい節主茶と言つて野点で茶をたてる

準備を等閑にしておくと自然野糞の作法も無茶苦茶になり、是が野糞の一番悪い点である。

ともいえるわけだ。

と申す訳ことがあるが、此味のあるとは共法紙を代用形式折り懐手して是を尻と運び此中に用意するのが通例である。

と一般に用いられるが、実いそうもなく、脱糞した共上に紙を被せ、此紙の真中を一寸捻り上げて、さてそれを捨てるのが秘伝である。

つまりそれを捨てこすることが秘伝である。

野糞とは西行法師のいつも引合に出る、西行は

行脚をすると、野糞は一切禁じられたが、其中に回しことがあるのは、西行の歌が鏡石と上つてあるのは野糞と解して西行の自信と出雲、宮、宮に行いたとある歌に「西行も野糞の山しかんとも糞の山くいこんが見知」とあるのは四方山の上の山吹をちらしたとあるのは、そこに解の宮あるうかくと宮のハたくる雷鳴して詩侯雨ちすの命者安び」とは実いたるる。

○アケビが女陰の形態に似て居ることは西一すまひもるのが自分れんら、アケビと云ふ本宮を知らるかつた。夢も通草子と書くが、実は女陰に似て

のる所から俗字なるを萌の字が出来てゐる、萌は
草陰のきざしてある。亦山せも アヒヒのるむ 兎角也と龍
んもの。又用玉ハ のツ字を者きたる也とも云ハ
れてゐる。依後こ山姫と云もアヒヒのるも
○游の船ゝ乗り込んで士宜やあ夫の真琉をちきな
らりしたこの、中ゝ方のおき孔るかあるゝ
敢漫に突撃 ハ日本人ハ誰でも敬ひます 会せてみます 志ゝし
私共のゝ考えハ許さんまもん 科学の原理
ゝ相変へらいと変ゝ者ハ至こ の自殺ひます
孔ゝ互面しそ ゝ日ゝは 鶏ひと 機械の
隙をなゆ ゝ人注清味がなるけん

ゝゝもん ゝの船で游ゝ船乗組員ハ下
士兵宇共、古参の優秀者とゝ長味
で選ばれのとそうてすが 荒い者ひゝ
丈に大抜ゝ者ゝ孔ゝ子供ゝ あつていろゝ
こゝを考ゝゝもんます

花験年から云ゝ元行機の方が高い課
ひゝが 私共ハ游ゝ船と元の機といつのを
選ばゝかゝといけゝ ゝ考ゝるまもゝゝ元
機を選ひます 元行機ハ才一番やかひ
ゝとひ 陸ゝ長
もて一合か二合か 自分の力ひ自分ゝ番
合て死ぬることハ何ともいゝ海

秋なることなれば我々は各新器についたる、艦長の命令通りやつて艦全体をもハ何をもしてみるのか分らぬ中に死なぬ人たちなかつたいさ沈没したとたんに人情をも助かるものなる動かぬ証拠なるこの忍のたらしし、親戚知のことをも考へることとしたらしし、その女をしたる死る方を考へるべきものなれども情をへのむず

三月六十日等もある鉱山中のやうな沈没したと絶対に助命の出来ることなかつたもあれども、しかし死なるべき故助作業を試みて、ようやく電流かりを入れとり、遂に夫が立ちをやつて

なるのかを入れ、しかしてこの人びとの命を救ひたるも辛いとい方もあるとこうなこと

とぞ。

○今い爆薬の作用でトンネル岩石も破壊することが出来るが、昔し道路開くるに岩石を削くるハひとく苦しいことなれども迅速人間業で八出来ないと絶対ことなるが、当時工夫さんと一法をしたる芋のウイキの乾燥したのを刻んとする石の上で焚き其の熱したる石を叩きの刻んのハ容易に削けることあつし現に北方法と成ひしたことが有ると云ふことみる、ズイキは春意を助くる異に用ひられてみるから、その不思議な力があるかも知れぬ。ズイキが石を

割る程の特別の偉力がある譯ではなく、執拗が破壊力を持つてゐるに過ぎない。而洋式も亦たゞ巖石を節かんとするに過ぎない。巖石の上に義士の墓を焚き、其の數一千ばかりあるを、菊花園をこぼつて破壊し、容易に碎けると思ふことは、大力こそ其の要件である事である。

○高崎屋呉服店を今場所も原始文化展覽會催さんとす（十番）行もとゞき、大山公爵家の支前岩砂安所の花瓶を如何とし、杉山壽榮男の花瓶市大、帝國博物館、其他の花瓶のすき者の為出品多く出陳さる。伝数百點に及んでゐる。從前北海道の金工陳列されたるものと氣分違ふ。

多くの平凡を免れつゝあるが、高田二十數年、發掘と研究が併行せられつゝある。其の形式が列品に接するあらゆる形式と實物を接し現實と知らんとする。脱皮考古前代物が之に今つゝあるべきである。

空前多かつたが、産業の進歩の為、無理なる推進の推定を震すものもあるやうに思はれた。北海の列島中先つ東方の沒意を惹いたのは、日本石器時代貴品の部さ書物の八戸所の長山岩次郎が山年間家の所から得たもの。木工品ひとつ

日本石器時代遺品の部　（順序不同）

青森縣八戸町　泉山岩次郎氏藏

石器時代木製品

從來石器時代に木製器具を發見する事は殆んど難事でありましたが、遺跡の狀態と遺物發掘方の研究進歩によつて關東では眞福寺に大山柏氏の發掘を見又是川の遺跡よりこんな遺物を發見する事を得ました。

二三三　太刀型裝飾品　一個

二三四　石器時代弓　三個

矢の根石は石器時代の各遺跡より出土して居ましたが未だ弓の原形にふれたものは皆無でありました。今茲に初めて當時の弓が見られるわけであります。

二三五　木鍬　三個

この外拓本に示した樣なものが出土して居ります。

二三六　腕輪　木製及び土製

二三七　朱塗櫛　二個

櫛の齒は木製で腐蝕し僅に內部の穴に存して居るのみです。

二三八　籠　一個

竹製籠に膠を塗布して朱色を施したもの。

二三九　籠　一個

籠類の榛を樹皮を以て括つたもの。

二三〇　椀　一個

當今の椀の形で口唇下部に浮紋を表してあります。

二三一　木製品　用途不詳　一個

二三二　編物

草の葉を應用して作つたもので繩紋土器の原體ともみるべきものです。

二三三　木製品殘片

從來石器時代の繩紋ひいてはこれが飯り木器の出土しないのは土質の關係で腐敗してしまつたものと思はれる。

十一原因であらうが木器の現物が現れないものの考へ方は從來無視されて居たと云つて、實を云へば木は石器時代の材料の使用し易いものであるから、石器時代から早く使用されてゐたに違ひない。

次に私の目を惹いたものは、ペイワン族やアミ族、タイヤル族等の工藝品である。

工藝の進んでゐることは一般を喫驚させる。

アイヌの口琴は系統を同じくするものがいくらかあるが、蕃族の工藝品はアイヌのそれとは全く別系統のものである。

アイヌの活動舞台は日本の北部であつて、日本人の趣味に遠く、アイヌの活動舞台は日本の北部であつて、日本人の趣味に遠かい。

台灣蕃族が去年の用ひる連杯といふものは、

八金屋敷出土、天明年間発見、二個の口から飲め

るやうなものもあり長さも三尺位あり行李の彫刻があるもあり、うつ〻蕃族の手際と思はれる位に工義に比べてとうもグロテスクである。彫刻した木枕もあり比較的一家の男女が生殖器を露はしたものもあり、又は四五の兒形が刻まれてゐる枕もあり、アイヌの枕の高雅な彫刻とは大いに異なるものである。すべて台湾のあの赤色を以て彩られ、赤布が表面に貼付してあるのは又アイヌの如き色彩豊富なるものなく、什器につて彩色が家と無い、近年アイヌは自己の趣味を真似て徐々赤の彩色を用ひるが為の内化の風

化したアイヌ本来の特色もあり、北海のものも往来する者が臆断したことは又多くもあるが、往来のない思ふ〻〻、無地い沈深の色を好み、裏地い火のぬきこもも好むなどは北海道の人の趣味の推断ひあつて甚だ適当のぬきに見て体験する火のぬきを矢張り装飾とする気が宜しく自然ひあるとも思ふのである。アイヌは決して赤色の強味のものことを以つても同じことが云ひのである。矢筈の彫刻の如きは実地に接きを重ねすす歌と一致の地方を描き、又とアテハメタかる者のあり誤つた推測が起るのは、これが学者の弊もあるる。

杉山寿栄男の自分の伝ふる人となりを、指摘もし
種々談話を交へた中で、前年採集のものも蕃
族の蕃族を訪ふた際のことを話つた。一般
に蕃族を闘争を好むものと思ふが、合理漢
りは、或る種族の決して他人を害さず極めて平
和を好むものもあるが武器をもたない、自分の今
出しもあるが、彼等自然の鎗、鉄砲
があるけれども、鉄の種類を書つたり鎗はの
かの儀式にも用ゐるものと解するものもある
と語つた。実地を踏んだものと云ふこんな
ことも分り面白かる。蕃人は釘のぬきこまを以
つて巧みに物を彫刻する。試みに日本の鋸利

な切り出しの数を無くてもの彼等はこれを落
ぬものもあり、ものもあり、手もとの必要
彼等は手紙で彫るのに差のある字ばかりを
待望風なるが小カタナを弟子に或るものを
廣かも はが彼かおきこと報告をもて
無れも書つたとも同一の彼らであることを云ふ
であるが古世蕃族の蕃族の機を織る機もある
が何彼かアイヌの使用する機が無いと
云ふ。

大山氏の陳列品の外四出土品が強と多かつた
たる物語る史前人類の出品と係る。

第一圖

人類とまで云へない、人間の遠い祖先

(Pithecanthropus alalus)

人類の初めは、この樣な人とも猿ともつかないものから段々と人間らしくなつたものです。然しこの樣なものたちの、直接證據となるものは、まだ見つかつて居りません。この畫し想像して畫いたものです。

第二圖

石器を使い出した最初の人類

(Homo primigimus)

今こそ花の都と云はれるフランス、パリーも今から十萬も二十萬年も前には、こんな荒野に原始の人々が野獣と戰つて居たのです。而してこの人々の使つた石器は今日掘り出されて居ります。

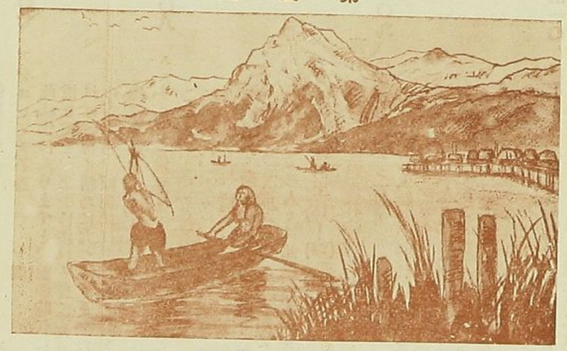
第三圖

氷河時代の人類

(Cro-Magnon)

これも今から一二萬年前の出來事です。氷河時代と云う寒さに、人々は洞穴にこれを避けなければなりませんでした。珍しいことは、この洞穴住者だちは畫が上手で、今でもこの人々の畫いたものが澤山遺つて居ります。

第四圖



湖上生活時代

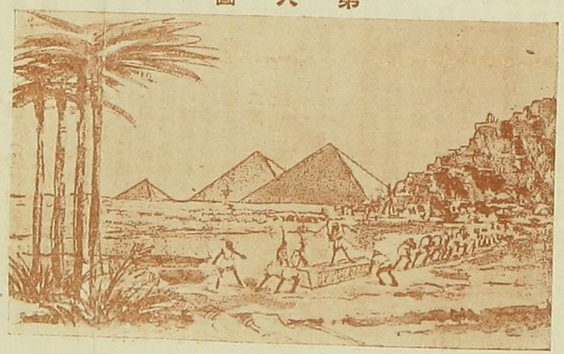
スキスの景色よい島に、こして住んだ人々の跡が、まだ澤山遺つて居ります。人々は家も舟も弓も上手に作つたのですが、まだ石器より外に金屬を使うことを知らなかつた時代です。

第五圖

青銅時代

人間は終に金屬を使用することを發明しました。然し其最初は發見され易く、熔け易い銅を使い出したので、これに鉛や錫などが交つたのが青銅であり、これで色々武器や生業具が出來、着物も上手に織る樣になりました。

第六圖



エジプト、ピラミツト構築時代

人間はこの頃になると、何んでも思う樣に出來る樣になりました。而して數十萬人の人々が數年掛りでこんな大きなものまで作し出しました。

○前の項（第二比古道）の記事の記を[illegible]
[illegible]金の[illegible]に載せんと試みを[illegible]
のが十三四歳の頃なりとて[illegible]
[illegible]に比べ、実に早稲田の一つを頼る因縁の深
いことなどあるからなり。
友人内藤栗城の男人命が負人の命年[illegible]の説
であることも、やはきつけ、私を祝ちんとも[illegible]
るの思ひ立とす。男代表が代表のやつて
来て、是れ[illegible]ならば、其意に任ずることなる
と、二言を結て此あを[illegible]の[illegible]来れば此の型係家
[illegible]裏なる良方[illegible]の[illegible]を必ずに[illegible]人となる
[illegible]つてやんと[illegible]

る因縁の深からぬわ[illegible]の人とやんへば、負の負債
[illegible]を必ずと[illegible]ことを[illegible]が[illegible]
[illegible]ならば[illegible]こ必ずと[illegible]
[illegible]ことあり[illegible]
[illegible]ならば[illegible]
[illegible]神の[illegible]と後の[illegible]比者[illegible]を[illegible]
[illegible]が何も[illegible]
[illegible]風[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

社会に対する責任を生ずる強盗法の問題が起り一週間を限つて此所と云ふ所がある強盜を利用して自家広告を為すなら偽善と云ふべきなり

東京朝日今朝の紙上に左の廣告を出す、曰く

一月十八日の

れは盜を捕へんとするの也者に比すれば故に

向ふ也也盜賊を捕へ自家宣傳を為す故に

『説教強盜』に告ぐ！

君の出没に依つて東京市民は一種の恐怖病に襲はれてゐる。君も亦現在の悪業が長く續くものではあるまい。

即時自首して出よ。

此の廣告發表後一週間内に自首すれば實際君の言ふ如く家族が困窮して居れば、實情調査の上、家族に一千圓を進呈しよう

この企ての成行は『平凡』誌上にて發表す

東京麹町區下六番町　平凡社

標原製

[illegible]

十九日

記

金一千圓の懸賞

説教強盜の捕縛者に

本社より贈呈

度に脅かされ、殊にこの徐盜の頻出する郊外一帯の住民は全く不安に打ちをのゝいてゐます。敵を一刻も早く取り除きたき趣旨からこゝに警視總監の諒解を得て左の懸賞を發表することにしました。

誰人でも（警官と然らざるとを問はず）いはゆる第一世説教強盜を本日より二週間以内（二月一日まで）に捕へた者に金一千圓を贈呈す

三年越しの長期に渡り犯行総六十回に上り、帝都の内外に出没してゐるいはゆる説教強盜は警官隊の不眠不休の努力にも拘らず今もつて捕縛されません、それのみか最近は幾多の模倣者さへ出て市民の生活は極度に脅かされ、殊にこの徐盜の頻出する郊外一帯の住民は全く不安に打ちをのゝいてゐます。

本社はこの社會の公敵を一刻も早く取り除きたき趣旨から

一、第一世説教強盜とは本紙でしば〳〵その旨報道した強盜を指し、捕縛した場合に**その當人であるか否かの判定**は警視總監に一任す

一、警官と一般住民とを問はず**二人以上で協力して捕縛した場合**の賞金の配分方法は警視總監に一任す

一、直接捕縛のことに當らざるも**犯人と察知して當局者に密告し**それがため捕縛し得た場合はこれを有力なる協力者と認め**同じく賞金三百圓を呈す**（但し密告者は本人の希望によつては絶對にその氏名を秘す）

○田中滋博士　古屋貞雄氏　神社の洋

占神占を宣伝する　実い博士　出発の際四谷府

TANAKADATE-AIKITU
TÔKYÔ-SI KOISIKAWA-KU
ZÔSIGAYAMATI 144
DENWA: USIGOME 6502

The Suwa Shrine,

Nagasaki, Japan.

The mikuji. No. 37.

Good luck.

It is just as there is an abundant fishing so unexpectedly.

One who has drawn this lot will have an unexpected gain, but he must be careful not to undertake a speculation lest he may not fail.

Chance.	Good.
Wishes.	Will be fulfilled beyond imagination.
Illness.	Slight case.
Marriage.	It will be all right.
Trip.	Good to start.
Person expected.	Will soon come.
Message.	Will come to-morrow.
Things lost.	Will be found out.
Dealings.	Will rise high.
Direction.	North-west.

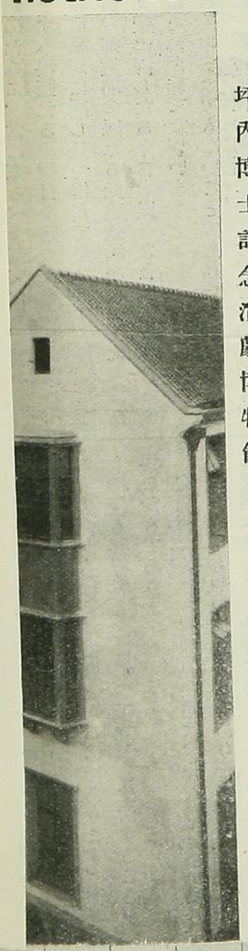
演劇博物館

坪内博士記念演劇博物館

第一巻
第一號

創刊號

Histrionem



開館式に於ける坪内博士の挨拶

（此の小册子は演劇博物館後援會の發行する所ではあるが、事實に於ては一種の館報でもある。それ故創刊に際しては計劃の當初から今日に到る經過を一と通り述ぶべきであるが、此館に關する一覽とか案内書めいたものが近日中に作られることになつてゐるから、それらは總て別の機會に譲り、茲には便宜上開館式に於ける坪内先生の含蓄多き辭辭を謹載しておく事とした。）

この殖産の後援会の後援会の後援会

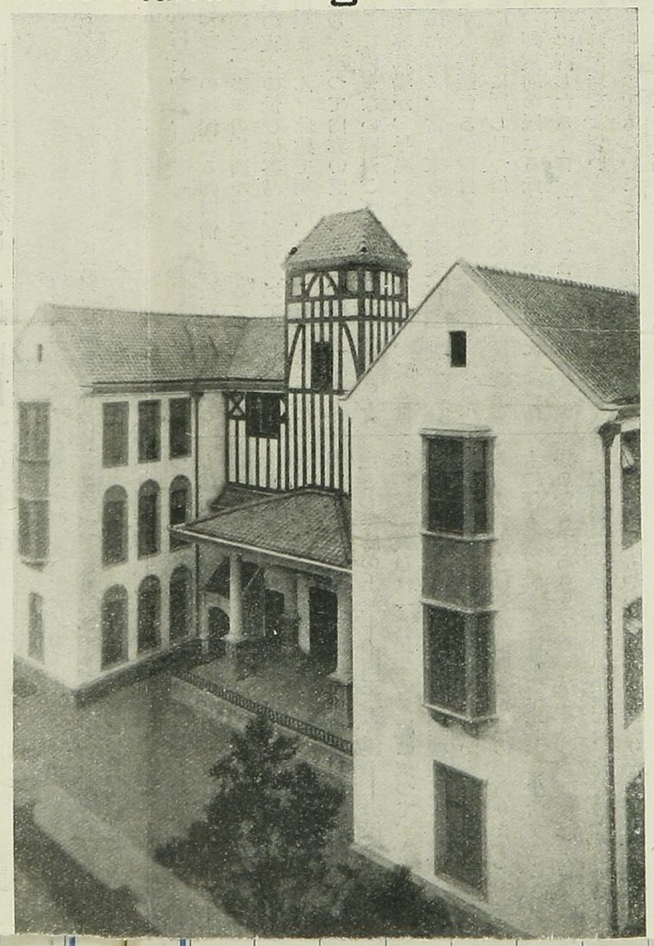
演劇博物館

第一卷
第一號

創刊號

坪内博士記念演劇博物館

Totus Mundus Agit Histrionem



◇展列目錄は七ページ以下にあります

を用ひたる意味なれども、唯此義
丁寧とまでは、其創合に関係
廉事なれば婚姻のすべき也

一 星霜集　全部

北方大政の木綿岐山が校閲と
聞し如きものなれども、実は支那に
類を木彫したるもの也、注文家
の小食といふ人数を抜くれ三種
を限りなりとも能き者なり

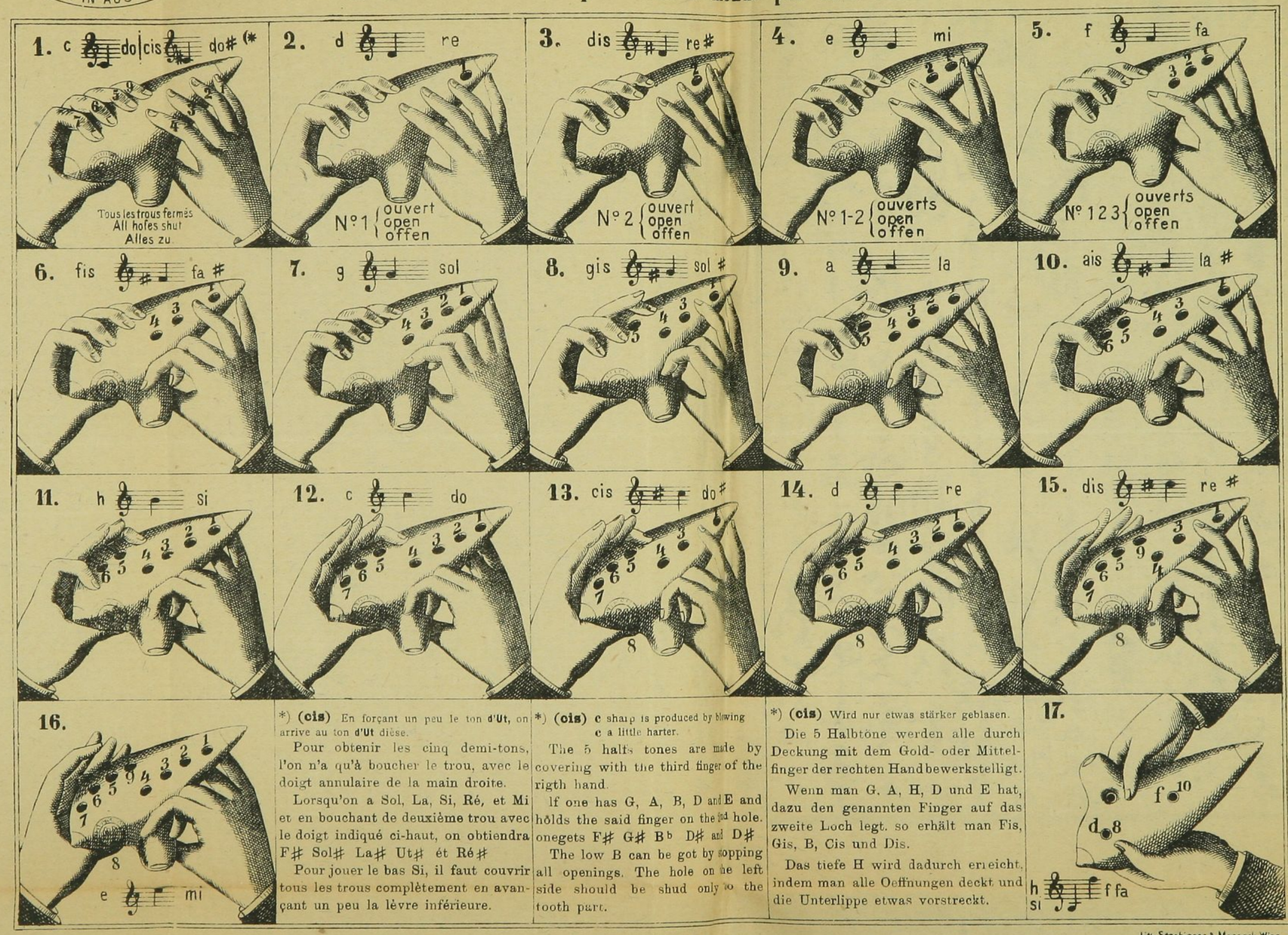
○神田の柴屋一座に、輿田柴の柴屋と見、小

品棚柴上にかんとを嫌ひ入る、土柴もまた紙
田の如き商家のもの也　ロカリナの名あり、
○私自分の出版する俳書すべての隠書を再版と称
するある医師が、百道先を張板もさせまじ
とりの情状、数度する、一の逸しにまあるを
れい高名医師の診を用ひたことを
もあるも患者が可きものあるこの外と云
外。流れる医者が自分の長く潜ずる一つ
も浴くに。衛ひ氣もし名家の治療とをひとり
を誇りとするこの大為ひもそべき
道先にあるく診察制　を抜つもコンナ道
乗をするものあり一言びある

○一昨年日本図書館協会の新年宴席に
於ける席上、貴会の好意の賜物なる
数と就て一言を述べて、実に此書を博少
きと最も一般土地の人の便を図らんとする
意味なるの為から、図書館設置の性質を帯
びてゐる。図書館協会なる此書を少
る故を以て閲覧に供せんとす。有志者が他の
勧誘と因らず斯る事をするのは誠を
も以て聴の便あると附け加へて、実に
席上石上宅嗣の日本最初の公共文庫の
ことを想ひ起し、然るに石上の文庫も書籍
書の如きものであつたことを考へ合せ

Méthode spéciale pour l'Ocarina

le nouvel instrument pour tout le monde par H. FIEHN.



*) **(cis)** En forçant un peu le ton **d'Ut**, on arrive au ton **d'Ut** dièse.

Pour obtenir les cinq demi-tons, l'on n'a qu'à boucher le trou, avec le doigt annulaire de la main droite.

Lorsqu'on a Sol, La, Si, Ré, et Mi et en bouchant de deuxième trou avec le doigt indiqué ci-haut, on obtiendra F♯ Sol♯ La♯ Ut♯ ét Ré♯

Pour jouer le bas Si, il faut couvrir tous les trous complètement en avançant un peu la lèvre inférieure.

*) **(cis)** c sharp is produced by blowing c a little harter.

The 5 halfs tones are made by covering with the third finger of the rigth hand.

If one has G, A, B, D and E and holds the said finger on the 3rd hole. onegets F♯ G♯ B♭ D♯ and D♯

The low B can be got by stopping all openings. The hole on the left side should be shud only to the tooth part.

*) **(cis)** Wird nur etwas stärker geblasen.

Die 5 Halbtöne werden alle durch Deckung mit dem Gold- oder Mittelfinger der rechten Hand bewerkstelligt.

Wenn man G, A, H, D und E hat, dazu den genannten Finger auf das zweite Loch legt. so erhält man Fis, Gis, B, Cis und Dis.

Das tiefe H wird dadurch erreicht, indem man alle Oeffnungen deckt und die Unterlippe etwas vorstreckt.

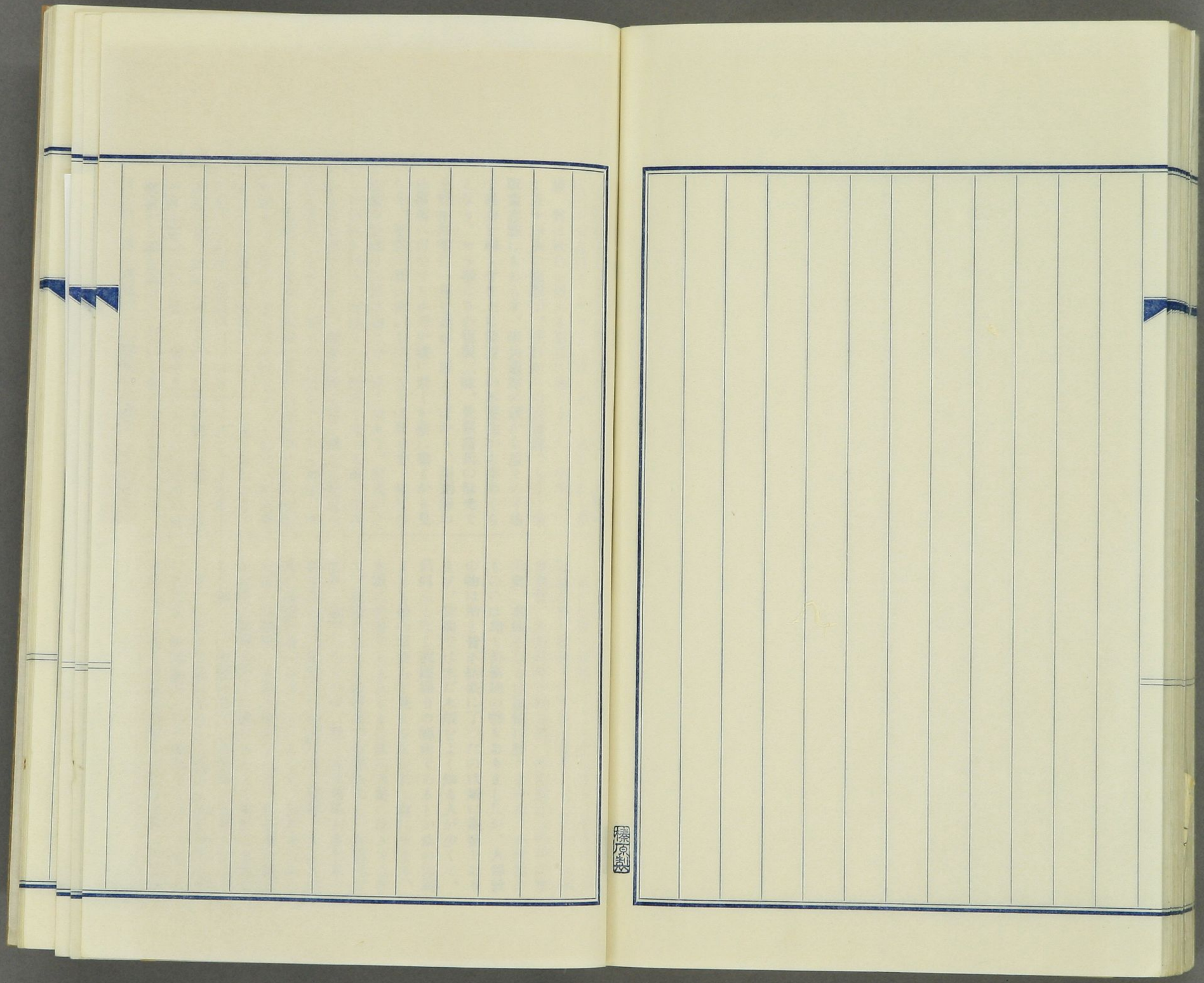
Lith. Stockinger & Morsack Wien

DÉCORATIONS:

Linz und Ried 1877, Sydney 1879. Vienne 1880, Mention honorable, Melbourne 1880, II. Pr. Médailles d'argent. Teschen 1880, Frankfurt a/M. 1881, Eger 1881, Triest 1882, Amsterdam 1883, Vienne 1884, London 1884, Nice 1884, Anvers 1885, Vienne 1888.

[illegible]

深草製本



複製漫談（一）

大山鳴動してといふ程でもありませんが、前吹聽ばかり大袈裟で、ヤレどぶ鼠一疋かと呆れられる漫談、實は餘白を埋める窮策に過ぎません。今年とつて五十四歳の複製子、生れからの古書通でもなく出版業志願にもあらず、徵兵適齡の秋から度々の手術で視力を弱らせた上に世渡りの不養生から半めくらとなり、せう事なさの複製三昧、先輩諸氏の餘光で十餘年斯業に一身を委ねて居ますばかり、彫刻師の仕事場へ行つても小刀が縱に動くか横に動くかも見えず、墨摺の濃い淡いもはつきりは分らず、毎日の新聞や手紙も大抵は讀ませて聞く始末で、版式がどうの和紙が何のと高慢らしく饒舌り立てる數々はみんな耳學問ですから、識者の笑を招く飛んだ間違も澤山現出しませう。初めから耻をさらすも無念、今回は彫刻宗の本山大塚祐次氏が自身執筆された年頭所感を次に揭げて責をのがれます。これは「御大典紀念木版繪葉書の製作について」と題したもので、複製には直接の關係はありませんけれど、木版界の現狀を先づ御知らせ申上げ、竹馬凧揚げの頃から四十餘年彫刀ばかり握つて居る人にもこんな能文の氣慨家ある事を明かにしたいと存じましたからです。

私が木版に從事してより今日迄に、紀念用の木版繪葉書が發行された事は澤山ありますが、日英博覽會、大正四年の御大典、平和紀念と今回の御大典、其他小なるは記憶に殘りませぬ。小規模のものには却て美術的の物もありましたが、大部數の物は殆ど皆不結果に了つたのは誠に遺憾であります。世間では未だ木版をよく知る人が少くて、只何んとなく我國固有の藝術であるとか他の印刷よりも繪の引立ちて見えるとか云ふ位に止まり、木版に從事する工人もまた世の大勢にひきずられて、仕事ほしさに依頼者の命惟れ奉じ、其責任を忘れて耻ぢもしませぬ。私も先帝樣御大典の折、記念はがきの調製に一部分ながら關係しましたが甚だ遺憾の事のみ多くありました。元來今の世に大部の印刷物に木版を使用するは、大急ぎの旅行に途中の風景も序でに眺がめんとて徒歩で出發すると同じく、景色は見たし目的地へは早く行きたしで、つまりは駈け足をして氣力は疲れ何物も目に入らず、滊車旅行の方が兩得といふことになりませう。こんな有樣で仕事をやらせる方もやる方

も夢中で、木版なる故に綺麗だと云ひ、やつと木版の仕事に有付いたと安心して、技術の巧拙を反省しないのは慨難に堪へませぬ。天壌無窮を壽ぎ奉る紀念の場合には特に謹慎せねばならぬ事と存じます。忌憚なく申せば、昨年大嘗祭御用の齋田の決定と共に着手して出來得る限り費用を節約し彫刻、印刷共に充分の用意をとゝのへ、工人には目出度仕事に從事した甲斐ある程度の工賃を給し利益を貪らないやうに製作擔任者を選ぶ必要があります。斯業の經驗にも何にもかまはず入札法一點張りにする位なら、製作を見合せた方がよいかも知れませぬ。マラソンすら人選を要す、固有の藝術を應用する仕事に人物にかまはず入札で定めるとは何事でせう。御大典紀念のめでたき繪葉書を批評するは甚だ畏れ多い事なれど、僞らず飾らず盛典を奉祝する心持から聊か存じ寄りを申して見たいと思ひます。

先帝樣の時は八月下旬に技術者の手に渡され、數は二百萬、出來期日は十月中旬と云ふのですから、技術も美術も考へて居る餘裕はありませんでした

今回のは八月上旬より着手して九月一ぱいに百四十萬納付と申す事でした。今回のは私は傳聞したばかりで經過の詳細は知りませぬが、此短時日では徒歩で滊車と競走するも同じです平素は疊の上に布團を敷き其れでも腰の冷えを覺えるなぞ云ふ連中を、工場の狹まき爲めとは申せ廊下の板敷に坐らせたといふ噂、此一事に考へても技術の巧拙人物の適不適等を顧慮する餘裕はさて置き、只期日に間に合ひさへすればと云ふ始末でした。是れは職人の横着からではなく、良いも惡いも云つて居られぬ急場の故にて、今其の出來ばえについて一々指摘する迄もなく、全體に木版の特色を失つてゐます。人物の顏に滿足のものなく、甚しきは片目欠けたのもあつたさうです。近年素人好みの版畫と申すもの世間に持てはやされて居りますなれど木版畫は所謂版畫と同意味のもの又同程度の者と誤解されては甚だ迷惑に存じます。所謂版畫なるものは繪心ある素人の餘技なれば、一定の原圖に因りて其まゝに摺り出すことはとても出來ぬ事でありまして、其の間の差別を世間の方々によく知つて頂くことも必要と存じます。今後大部數の摺物ある場合には、世間にも木版の性質眞價を領解して貰ひ、技術者側も昔のまゝの方法ばかりでなく文明の利器も程よく應用して、氣品いやしからざる物を製作する事にしたいと存じます。世間知らずに舊來の技術を誇り、日進月歩の印刷法を笑ひてのみ居つては斯道に不忠實の責を免れませぬ。尤も今回の繪葉書はどちらかと云へば一般的の普通物にて文化的方法を應用してもよいと思ひますが美術本位の木版畫には益々手と時間を要すればとて之を省くことは聊かも思ひよらず、機械の力を借りない所に木版の眞價もあるのですから、只時勢に合はすとて全然用ひざるは食物の榮養分をのみ重んじて風味を顧ざるが如くであります。風味を無視して滋養物を詰込んでも身體の榮養とはなりますまい。ましてや文明の母とも申すべき活字の字母は今でも木版の技術によらざるを得ない有樣であり、大震災の直後は文明の利器も一時屏息して一時的ながら木版の力を大ぶん要しました。啻に風味だけの問題には非す。さればとて何等かの機關をつくりて工人に衣食を給せんかなり技術は益々退化すべく目今の現狀としても新其れは只依頼心のみつよきなまけ者を養ふことゝ聞、雜誌、活動寫眞の廣告版の如きによりて技量尤も拙にして却て産をなすあり技倆すぐれて生活に事欠く者あり食物に風味をたもち事物に趣味を感ずる世の識者は其從事者を鞭韃して自らつとめて其處を得せしめんとせらるゝことを念願して居ります。

同　東京美術學校
同　交誠堂書店
同　藤村作氏
同　小笠原長幹氏
同　堀越龜三郎氏
同　横山大觀氏
同　野口貞之助氏
同　剛　豹作氏
同　鎌木清方氏
同　細木原青起氏
同　山口剛氏
同　河竹繁俊氏
同　吳谷川謙也氏

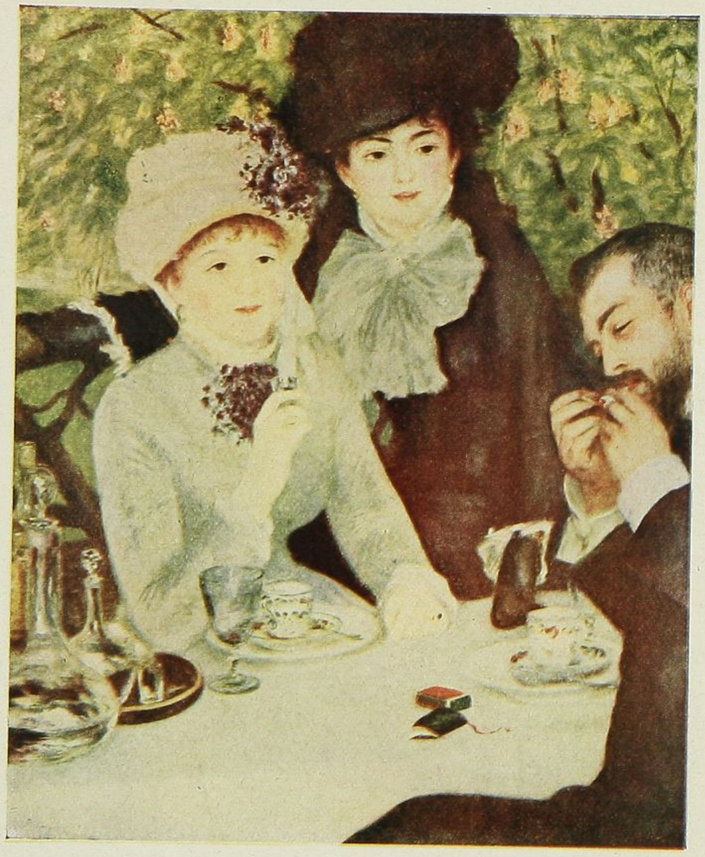
（以下次回）

同　大阪毎日新聞社
同　山村探醫堂氏
同　中島仁之助氏
同　近藤明道氏
同　山中商會
同　朝日文庫
同　原田承一氏

同　名古屋市　奥野清太郎氏
同　高安六郎氏
同　須田寛三氏
同　南木芳太郎氏
同　藤岡繁氏
同　杉本梁江堂氏
同　村上伊兵衛氏
同　家村書店氏

同　大庭柔太郎氏
同　小林清親氏
同　小西孝雄氏
同　本間雅晴氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏
同　大阪市　中村貞次氏

以下
6丁
白紙



樂しき朝　ルノアール作

閲覧室

榛原製